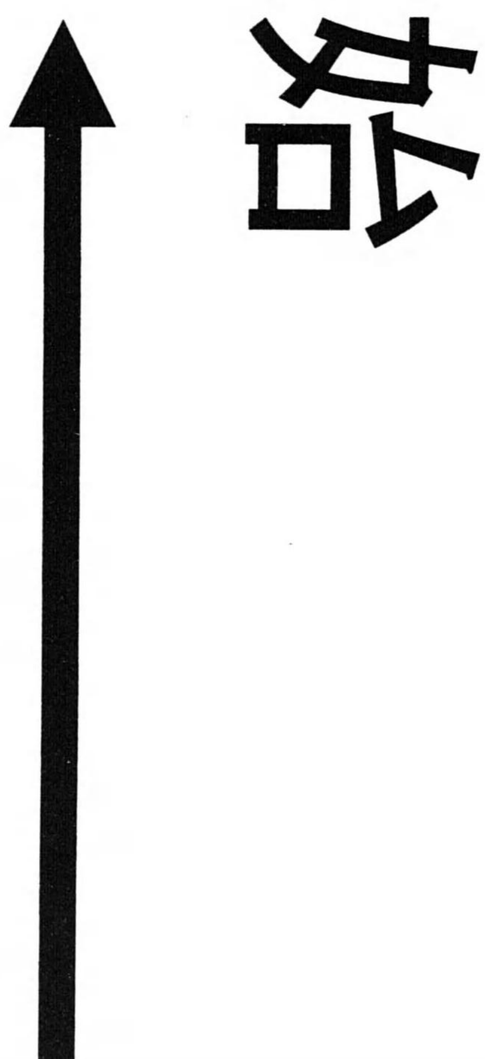
別書誌
合2冊

145
17.1



5. 5.23

14.5-17イ
1200501211385

滿鐵調査資料第一〇三編

滿洲の莫大小工業

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課

凡例

一、本書は滿洲に於ける莫大小工業の現狀を略述せるものである。

一、永く先進列强の好市場であり、本邦工業品の大顧客たりし支那に於ても近時工業熱の勃興目覺ましく近代的工業の移植せられるもの相繼ぎ粗工業の或るものに於ては外國品と桔抗し得るに至た。

一、滿洲は中南支那に比すれば工業的には猶著しく遲れてゐるが唯莫大小工業のみは—精確に云へば其內の靴下工業のみは—數量的には猶論ずるに足らぬが、支那人の手により經營せられてゐる移植工業中現在極めて稀な成功せるもの丶一である點で注目に値する。而してかゝる近代的工業の成功は、滿洲を其製品の市場とし來たつた我國工業界に影響する所甚大なものがある。敢て本篇を編する所以である。

一、本篇の資料は主として滿洲各地の商工會議所、滿鐵地方事務所、滿鐵公所、間島領事館、哈爾賓商品陳列館より得た、此所に記して感謝の意を表す。

一、編者　工藤武夫

昭和四年七月

庶務部調査課

14.5-174

滿洲の莫大小工業

目次

緒論……一
第一章　滿洲に於ける莫大小類貿易狀況……四
一、總說……四
二、莫大小生地……六
三、襯衣類……八
四、靴下……一四
五、手袋……二二
第二章　滿洲に於ける莫大小工業概說……二五
一、概說……二五
二、滿革及現時の主なる生產地……二七
三、生產規模……三一
四、機械……三二
五、原料……三六
六、滿洲の莫大小工業製品と其の競爭品……三七
七、滿洲の莫大小工業の將來……四三

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課
寄贈本

昭和四・八・廿四
帝國圖書館藏

目次

附
附一、支那本部に於ける莫大小製造狀況……四四
附二、我國に於けるメリヤス工業及其貿易狀況の概要……四七
第三章　滿洲各地に於ける莫大小工業の現況……五一
一、大連……五一
二、營口……六一
三、遼陽……六五
四、奉天……六六
五、安東……六九
六、鐵嶺……七一
七、長春……七二
八、吉林……七六
九、哈爾賓……七七
十、鄭家屯……八〇
十一、間島……八二

滿洲の莫大小工業

緒論

莫大小類が支那人の生活に入り來たつたのは比較的近年の事に屬するが、輕快にして體裁好く且保溫に適するを以て、或は襯衣類として又靴下、手袋其他として漸次使用せられ、殊に其の生活の歐米化する近時の傾向に連れて需要激增し、其の將來は益々有望視されてゐる。而して過去に於ては其供給は全く外國よりの輸入に俟てゐたのであるが、其の使用が一般化され需要が激增すると共に、國內に於て其製造を企つる者相繼ぎ、今日に於ては其の需要額の十半は自國製品で充たし得るに至つた、殊に莫大小製品中支那に於ける需要の最も多い靴下は其の製造の工程が簡單で極めて小資本で容易に事業を開始するを得、且小規模の家內工業を以て必ずしも工場生產に比し不利なりと斷ずる事が出來ぬため、經濟組織の發達未だ十分ならず大資本の集積を困難なりとする現時の支那の經濟狀態に適合せるものあつて著しい發達を見、上海、香港を初め中南部支那の各地方に於て旺に營まれ技術も大いに進步し、今日に於ては其の製品は特殊の物を除いては外國品に何等劣る處無きものを生產するに至り、普通品に於ては外國品は其の市場より驅逐せられ、支那に移植せられた多くの近代的、歐米風の工業中最も成功せるものゝ一に數へられてゐる。

滿洲に於ては其の土民の生活程度猶低きと又保守的で舊慣を墨守する傾向あるために需要も尠く其の製造も不振である。殊に大資本を要し、大經營を利とする莫大小生地、襯衣類等は到底工業先進國の製品と競爭出來ざるため今日

の處其の製造に從事せるものは皆無である。唯靴下工業のみは上述の如く需要多く操作簡單で且小資本で營み得るために既に大正の初年頃より各地に勃興し、最近に於ては滿洲の各都市に於て之を見ざるもの無きに至るまで普及せられ今日の滿洲に於ける唯一の莫大小工業である、從て以下本書で述べんとする處は殆ど靴下工業に關する事のみであるのは盡し止むを得ざる所である。

次に莫大小各製品の滿洲に於ける需要狀態の概況を記す。莫大小生地は滿洲に於ては全然生產無く且需要も尠く別に記すべき事も無い。

莫大小の襯衣類は從來滿洲に於ては邦人、外國人以外には其の需要左迄多く無かつたのであるが、其の體裁の點から見ても又保溫の點から見ても又着心地の快適なる點から見ても從來支那人の使用し來たつた綿布製の襦袢に優さる事萬々である。唯價格の點で稍高價なるを免れぬが一般支那人の生活程度向上の傾向に連れて其の需要も漸增の趨勢を示し將來は相當有望なりと見られてゐる。一體支那では冬シャツ、即ち起毛せるものを衞生衣と云ひ、夏シャツを汗衣と云てゐるが、支那向のシャツは本邦に於けるのと稍異てゐるのが迎へられてゐる。即ち支那人は每朝洗面の際半裸體と成り頸筋及背の上部を洗ふ習慣がある。從て通常の頭より被る丸形のシャツを着用するのは一々脫衣の繁に堪えざるのみならず滿洲の如き嚴寒の地にあつては到底不可能であり、且其の都度シャツに水沫浸潤して汚損するを免れぬ。從て前割襯衣を好むのは自然の勢で我國の當業者も此點に注意して以來俄に其の對支輸出を激增する事を得たのである。即ち支那人向のメリヤスのシャツは一部の歐化せる都會人向を除いては何れも立襟ポケット付で前開きのものが歡迎せられてゐる。ズボン下は腿帶子を使用する關係上腹部太くて先端の割れてゐるのが好まれるが多くの者は固有の褌子を用ひてゐるために其の需要はシャツの三分の一に過ぎぬ。

次に靴下の需要狀況を見るに、邦人とは異て足を露出する事を甚だしく忌む支那人には靴下は生活の必需品である從て我國に於ては莫大小と云へば直ちに襯衣類が聯想され事實其の製造高が最も多いのに反し、支那では靴下が最も重要な莫大小製品である。從來支那人は襪子と稱する綿布製の足袋を使用し來たつたのであるが、西洋靴下—支那人の所謂洋襪子が輸入せられるに及び、其の輕快にして穿き心地好いのを喜んで之を使用するもの漸次增加しつゝある然し滿洲全體として見るに現在の處では猶此の洋式靴下を使用するのは一部都會地の居住者に止まり滿洲の人口の大部分を占める農民は何れも從來の襪子を使用してゐるのであるから此等の間に其の需要を喚起し得たならば其の需要額は激增するものと思惟され最も將來を有する商品の一である。

其他手袋、襟卷、スウエター等あるも此等は現在の滿洲の支那人の生活には左程必要なく、シャツ、靴下に比すれば遙に重要の程度薄く、將來も其等程有望なりとは思はれぬ。

第一章　滿洲に於ける莫大小類貿易狀況

一、總　說

本書は專ら滿洲に於ける莫大小類の生產狀況を記述せんとしたものであるが、滿洲に於て消費せられる莫大小製品中滿洲に於て生產のあるのは僅に靴下類のみで其他は總て支那本部及外國よりの輸移入に俟てゐるのであるから、其の貿易狀態を知るのもあながち徒爾に非るものと信ずるが故に以下其の概略を記する。但し滿洲に於ける莫大小類の需要猶多からざるため其の貿易額も少く、ために貿易統計の上に於ては年度により又貿易港により其の分類法を異にし或は他の品目に包含せられる場合が少くない。從て其の正確なる數字を得る事は不可能で以下記する處も唯其の輪廓を傳へるに止まる。

滿洲の莫大小類貿易額（單位海關兩）

年度	輸移入高	輸移出高	再輸移出 外國品	再輸移出 文那品	輸移出計	差引高
大正四年	海關兩 三八六、六五八	—	—	—	—	海關兩 三八六、六五八
同九年	九六七、三七〇	二〇五	—	—	二〇五	八六七、一六五
同十年	七九六、九六四	六四一	—	—	六四一	七九六、三二三
同十一年	五六二、七三二	七	—	—	七	五六二、七二四
大正十二年	七〇四、二二四	二、四六九	—	—	二、四六九	七〇一、七四五
同十三年	五六八、七七八	二、四一六	—	—	二、四一六	五六六、三七二
同十四年	八九四、八三六	一、二二四	二、五〇七	—	三、六三一	八九一、二〇五
昭和元年	一、二七二、五九〇	二、七八五	六、八三八	七三	九、六九六	一、二六二、八九四
同二年	一、二五五、九四〇	二、八四五	二、七六〇	一四四	一四、七五九	一、二四一、八二一

即ち滿洲は莫大小類の輸移入地であつて、輸移出額は再輸移出を含めて輸移入額の一分强に過ぎぬ。

次に此等の內輸移入の種類、數量、價額を見れば大約次の如きものがある。

滿洲に於ける莫大小類製品別輸移入高（價額海關兩）

年度	品種	莫大小生地	襯衣類	靴下	手袋	計
大正四年		—	一九九、〇〇三	一六九、七〇七	一七、九四九	三八六、六五八
同九年		三九、七六〇	五六八、六四四	三二、八一三	四六、一三三	九六七、三七〇
同十年		一二、六四三	二八一、一一〇	四四、九六、九一	四三、五二〇	七九六、九六四
同十一年		三三、七七二	二一五、五八三	一五六、八七七	五四、六一九	五六二、七二一
同十二年		六一、〇一三	三三六、七六七	三四、七二九	五九、一二九	七〇四、二二四
同十三年		一七、六八二	一六二、二〇三	三三八、一〇七	七〇、七九七	五六八、七七八
同十四年		五七、〇五二	二四三、九〇三	五二二、五六五	八一四、八三六	八九四、八三六

昭和元年	六八、二七三	三七六、九二九	七五、七二四	七三、六五四	一、二七二、五九〇
同二年	六三、五六七	三四八、八三一	七六、二一九	八六、四〇三	一、五五九、九四〇

但莫大小製品は年により、輸入港により又品種により分類法を異にしたり或は他の物に包含せられたりする場合が尠くない。從て本表に掲げた數字は實際より小であるを免れぬ。

昭和二年の輸移入額百八十萬圓中生地の輸移入高は僅に五分、襯衣類は二割六分弱で、靴下が最も多く六割八分を占め手袋は七分弱に止まる。

二、莫大小生地

現在の處莫大小類は悉く製品として輸入されてゐるために其の生地の需要は尠く從て滿洲に於ては全く生産無きにも係らず輸入額は極めて僅少に止まり、且格別增加の傾向も見え無い。唯最近に至り原料生地を輸入して襯衣等を製造し樣とする者が奉天、哈爾賓等に二三現はれた模樣であるから、此の製造が相當の成功を見た曉には其の輸入額も激增するものと思はれる。其の滿洲輸入高は次の如し。

莫大小生地の滿洲輸入高

年度	數量 大連	數量 安東	數量 計	價額 大連	價額 安東	價額 計
大正九年	四四三撫	—	四四三撫	三九、七〇海關兩	—	三九、七〇海關兩
同十年	二七一	—	二七一	一三、六四三	—	一三、六四三
同十一年	七六七	—	七六七	三三、七七二	—	三三、七七二
同十二年	一、〇八五	—	一、〇八五	六一、〇一三	—	六一、〇一三
同十三年	起毛セルモノ三一〇	—	三一〇	一七、六八一	—	一七、六八一
同十四起	起毛セルモノ四〇四	六二四	一、〇二九	一九、二五六	三七、一二九	五七、〇五二
昭和元年	セサルモノ一、五六六	七〇〇	一、二六六	二九、三五八	三八、九二五	六八、二七三
同二年	四七三	六九	一、〇九二	二三、九七六	三九、五九一	六三、五六七

輸移入莫大小生地に支那品は無い。大正十三年以前の大連以外の輸入高は不明である。

輸移入莫大小生地の大部分は日本品である。例へば昭和二年の輸移入額中日本品以外は英國品が五擔、五百四十兩あるに過ぎぬ。

而して其の再輸移出額は極めて少く次の如くである。

年度	數量 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計	價額 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正十四年	一擔	—	—	—	一	一	—	—	—	一
昭和元年	二	—	—	—	二	一六	—	—	—	一六
同二年	三	—	—	—	三	二六〇	—	—	—	二六〇

三、襯衣類

從來滿洲に於ける莫大小の襯衣類は主として邦人及外人のみに使用せられ、支那人間に於ける需要は微々たるものであつたのであるが、其の肌着としての眞價の認められし爲にや最近に至て需要額激增の傾向を示し、其の輸移入高も昭和元年には三十七萬七千兩に及んでゐる。而して其の九割までは日本品で外國品は僅に一割を占めてゐるに過ぎぬ。

其の貿易港別輸移入高は次の如し

年度	數量 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計	價額 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正四年	四八四七打	—	—	—	四八四七打	一九九〇〇三海關兩	—	—	—	一九九〇〇三海關兩
同九年	二一三一擔	—	—	—	二一三一擔	五六八六四四	—	—	—	五六八六四四

年度	港別 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正十年	三〇八一擔 一三四一五打	—	—	—	三〇八一擔 一三四一五打
同十一年	一四五七擔 一三四〇三打	—	—	—	一四五七擔 一三四〇三打
同十二年	一五五擔 一〇一四打	—	—	—	一五五擔 一〇一四打
同十三年	一一九六擔 九九四七打	—	—	—	一一九六擔 九九四七打
同十四年	一五五九擔 一〇〇三七打	四擔 三〇九打	一〇三九擔 二五六五打	—	一五五九擔 一〇〇三七打
昭和元年	一八五八擔 一一〇五〇打	四三擔 八〇打	一五〇〇擔 二八五一打	三九四 一〇五打	三九四 一〇五打
同二年	一一四三擔 一六六二九打	二七擔 四打	一三七三擔 三七六三打	一八打	一八打

但本表に掲げた數字は悉く外國品で支那製品の移入額は不明である。

輸移入襯衣類の種類別數量は次の如し。

年度	種類	港別 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正四年	綿製（起毛セルモノ）	—	—	—	—	—
	同上（起毛セルモノ）	四八四七九打	—	—	—	四八四七九打
	純毛製（毛綿交織製）	—	—	—	—	—

年度	種類	同上價額（海關兩）	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正四年	同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）	六四六打	一九〇〇三	—	—	—	一九〇〇三
同十三年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	六四六打	一一〇四五	—	—	—	一一〇四五
同十二年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	二〇四五打	二三八打	五七一打	一五一五擔	一五一五擔	二〇四五打
同十一年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	一四〇三打	二四八打	一四五七擔	九五三打	一四五七擔	一四〇三打
同十年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	三五一打	一一三〇打	八九四打	三〇八一擔	一八九打	三五一打
大正九年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	七四五打	二六四打	二三三擔	—	—	七四五打
同十四年	純毛製（毛綿交織）同上（セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	五二三打	九五三打	一五九擔	四擔	一〇五九擔	五二三打
昭和元年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	二九六打	一〇七五打	一八五擔	四擔	一五〇〇擔	二九六打
同二年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	一二四五擔	五七五六打	一〇七四打	八〇打	二八五打	一二四五擔
同十三年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	一一九六擔	六四六六打	一五五五擔	一二四擔	一五〇〇擔	一一九六擔

年度	種類	同上價額（海關兩）	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
同十四年	純毛製（毛綿交織）同上（セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	二三三六打	一二三五打	二〇九六擔	四四擔	一〇五九擔	二三三六打
昭和元年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	一二四〇五打	一〇七五打	一五〇〇擔	一三七六打	三四〇〇擔	一二四〇五打
同二年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	一九七三打	二九六打	一三七六擔	一九七三打	二九六打	一九七三打
同十三年	純毛製（毛綿交織）同上（起毛セサルモノ）綿製（起毛セルモノ）スウエタートラウザー	六四六六打	一一九六擔	一〇五九擔	一二四擔	一一九六擔	六四六六打

同十二年				同十一年				同十年				大正九年			
絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー
100.000	一.三六	三五.〇四五	一六.四九	一三一.四六六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三三.〇七三	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
一四三.四〇五	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
三三.〇七三	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
一四三.四〇五	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
三三.〇七三	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
一四三.四〇五	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
三三.〇七三	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
一四三.四〇五	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九
三三.〇七三	一四三.三七〇	一一五.六九六	五.七四五	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九	一〇五.〇五六	四〇.〇五六	一一.〇四	三六.八四一	一八四.八四三	八九.三四	一.〇七一	四.一六九

同二年				昭和元年				同十四年				大正十三年			
絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー	絹製(起毛セルモノ)	同上(起毛セサルモノ)	純毛製(毛絹交織)	スウエダートラウサザー
八〇.一三六	九四.五六六	—	四四.九一	一九.一四三	三三.六七一	—	三三.六七	一一三.三四一〇	三六.三五七	—	一一.六四四	一六.六六三	三六.五七〇	一一.六四四	一六.六六三
七.六六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一.三四六	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	三.七〇九	一.一九四	—	四.九六	—	—	—	—
—	—	—	—	六.四八	四四	—	四.三四	一四.九九〇	四.九四四	—	八〇.八五四	—	—	—	—
五八	—	—	—	一四七.〇〇七	四.三九〇	—	一三一.三一七	—	—	—	—	—	—	—	—
一.六六	—	—	—	一.四七	五五.九	—	一四.三四	九.九六	一〇〇	—	四.八五六	—	—	—	—
八.八三四	一四.三七一	三.六八一	四四.九一	三.六八一	四.三七一	—	四四.九一	一四.九九〇	四.九四四	—	八〇.八五四	一六.六六三	三六.五七〇	一一.六四四	一六.六六三
七.六六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一.三四六	—	—	—

次に肌着類の再輸移出高を見るに次の如し。

年度	數量 大連	數量 牛莊	數量 安東	數量 哈爾賓	數量 計	價額 大連	價額 牛莊	價額 安東	價額 哈爾賓	價額 計
大正十四年	一五五打	—	—	—	一五五打	海關兩 一四六三	—	—	—	一四六三
昭和元年	二五八打	—	—	三四打	二五八打	二四八四	—	—	三四	二八〇八
同二年	二五三打	—	—	六五打	二五八打	二〇三六	—	—	七〇五	二七三二

四、靴下

靴下は滿洲に於ける莫大小製品中最も需要の多いもので今日滿洲には相當の生産あるにも拘らず猶輸移入莫大小製品中最大の割合を占めてゐる。

最近數年間の其の滿洲輸移入高を見るに次の如し。(但し此の統計の大正十一年以前は營口に移入せられた支那品の數字を缺いてゐるために適確なる趨勢を知る事は出來ぬ。)

滿洲輸移入靴下數量及價額

年度	數量 外國品	數量 支那品	數量 計	價額 外國品	價額 支那品	價額 計
大正四年	一五五、一五八打	一四三、二七三打	一六九、四三一打	海關兩 一六六、四八九	海關兩 一三、二一八	海關兩 一六九、七〇七
同九年	一四四、八一七打	六三、六七八打	二〇七、四九五打	二四八、五二八	六四、二八五	三一二、八一三
同十年	一八一、二六六打 二八九擔	一六七、〇七九打	三四八、三一五打 二八九擔	三〇三、六七六	一五六、〇一五	四五九、六九一
同十一年	二二、一三三打	二一三、八一打	二三四、〇三三打	二五六、四一三	一〇三、三四四	二五八、七五七
同十二年	二九、六九九打	一八三、一〇三打	三〇一、八〇二打	三四、九二四	一七七、九〇四	三四七、二九五
同十三年	七一、五九八打	一七七、七五九打	二四九、三五七打	一六六、五六〇	一七一、五四七	三三八、一〇七
同十四年	三四、九五一打 一、二五五擔	三二、六四五打	三三七、五九六打 一、二五五擔	二一〇、〇六六	三〇二、四九九	五一三、五六五
昭和元年	五六、一五九打 九〇八擔	四二八、九〇八打	四八五、一六六打 九〇八擔	三四〇、七一七	四一三、〇〇七	七五三、七二四
同二年	五九、四八九打 四〇三擔	四四五、三一〇打 六擔	五〇四、七〇九打 四〇九擔	三〇六、六三三	四七五、五〇六	七八二、三九

靴下の輸移入高は逐年增加の傾向にあるが、大正十一年以後は支那品の移入高の方が外國品のそれよりも數量に於て多くなり、價額に於ても大正十三年以後は支那品の方が外國品より多くなつた。以て如何に支那本部に於て同工業が發展しつゝあるかを察知するに難く無い。

輸移入外國靴下の大部分は本邦品で唯純毛製、絹製等の高級品及婦人用其他の特殊品に於て英米品が相當輸入せら

れてゐるに止まる。

最近三年間の輸入港別輸移入高を見るに次の如し。

年度	數量 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計	價額 大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正十四年	三七、七五五打	五五九擔	一〇四、七九八打	八二擔	一三三擔	一八九打	三三七、五九六打	一、一五五擔	海關兩 三一五、〇三一	海關兩 一〇三、四八九	海關兩 五二二、五六五
昭和元年	三五七、三五七打	三三九擔	一一一、〇六六打	二四擔	一、八〇〇打	一七六擔	四八五、一六六打	九〇八擔	五四九、八三三	一一四、七三一	海關兩 一九、二六四
同二年	四三八、七一五打	二〇四擔	五五、四三八打	一〇擔	五、九五五打	一二三擔	六、六二一打	七三擔	五〇四、七〇九打	四〇九擔	六七、三三五五	六二、三三四	二七、六三三	二〇、九二八	七五五、七二四	海關兩 五二二、五六五

其の價額に於ける輸入地別百分比を見るに次の如し。

年度	總數	大連	牛莊	安東	哈爾賓
大正十四年	一〇〇•〇	六一•五	二〇•二	一四•六	三•七
昭和元年	一〇〇•〇	七二•五	一五•二	八•四	三•九
同二年	一〇〇•〇	八六•〇	七•八	三•五	二•七

即ち近時大連港の輸移入額の增加は目覺ましく、牛莊、安東は漸減の傾向にある。

次に各港別品種別に輸移入高を見るに次の如し。

大連に於ける外國品靴下の輸移入數量　（打）

年度	綿製 起毛セザル ガス絲	綿製 起毛セル 其他ノモノ	綿製 起毛セルモノ	毛及毛綿製	絹製	其他	計
大正四年	九〇八三打	四七〇七九打	一打	七〇七打	不明	二一、一一〇打	六七、九七九打
同九年	一七、五〇七	三五、六五五 一七三擔	二八、三九七	一一、九〇三	不明	四五、五四八	九八、〇〇九
同十年	二八、四〇七 五五五擔	六二、一〇八 三三四擔	三三、三九二	七、五六九	不明	三、九八一	一三四、四七七 二八九擔
同十一年	三一、二四〇	四八、六三一	六〇七九	七、〇八六	不明	一、一三七	九四、一七三
同十二年	一五、三四〇	五四、四二六	五、五七五	五、五一四	一三八	六、八〇〇	八七、七九三
同十三年	二、九一四	四〇、六六四	三、三三三	三、五九三	五四一	八、一一〇	六一、〇四四
同十四年	擔 九四	擔 四四五	三、三六六	七、〇四六	八四	九、五一三	五三九擔 一九、九二八打
昭和元年	擔 一八	擔 三三	九、〇八六	四、三六〇	六六	三八、二六六	三三九擔 五一、一四八打
同二年	擔 一七	擔 六	一二、五八九	五、五九一	—	三一、三八五	二〇四擔 四九、四六五打

同上價額（海關兩）

年度	ヲルガイズス起毛糸ママーザ綿製	其他起毛ノモセノル製	ノ起毛セルモ製綿	毛毛綿製及	絹製	其他	計
同大正四年	一三六、三四	三一、四三	一	一三、八四	不明	一六、三九六	六二、九四七
同　九年	三四、五一九	五六、四六六	三六、六五	三六、八九三	不明	五、三一〇	一四、三四三
同　十年	四七、一一五	八六、六三	四六、一六六	二六、二六四	不明	一〇、九三六	二一、七一三六
同　十一年	四一、七四三	五〇、一六三	九、七六八	一七、三〇一	不明	三、三六六	一二、二四九
同　十二年	二五、六三一	五九、四〇四	九、六〇五	一六、九七一	一、〇九	一四、七五〇	一二、七四九〇
同　十三年	五、〇一六	四八、五〇	九、二九六	一一、四九	二、一九	二四、四七三	一〇〇、六七七
同　十四年	一七、六六九	四九、三九	五、二三	一八、四〇〇	二、一六	三一、一二八	一二、〇一三
同昭和元年	三六、〇七九	二七、四六六	二四、六三三	一四、九七七	四四	一五、三四〇	一三、四六九
同　二年	二〇、〇六六	六、六一〇	五六、三四五	四〇、三六六	一	一四、〇一四一	一六〇、五九〇

大連港移入支那靴下數量、價額

年度	綿製 數量	綿製 價額	其他 數量	其他 價額	計 數量	計 價額
同大正四年	一一四、六九六打	一〇、四一五兩	—	—	一一四、九九六打	一〇、四一五兩
同　九年	一六六、六九	一六、二一五	—	—	一六六、六九	一六、二一五

牛莊、安東、哈爾賓輸移入國品靴下

年度	牛莊 其他綿製マ十二年ヂ	安東 ガス	安東 其他	哈爾賓 片セサルモノ面起毛	哈爾賓 其他	哈爾賓 計	計
同大正四年 數量	一一六、四一打	—	一六、五九打	—	一〇、七三打	一〇、七三打	一六、八六打
同　九年 數量	一六、一六四兩	—	一六、一六四兩	—	一四四、六三兩	一四四、六三兩	九四、四一兩
同　十年 數量	三一、九四一打	—	三七、九一打	—	五、七六打	五、七六打	四六、〇六打
同　十一年 數量	一四、三四六打	—	六、二六五兩	—	八、二六五兩	八、二六五兩	一五、一九六兩
同　十二年 數量	二九、〇四九打	—	一四、三〇四打	—	一四、三〇四打	一四、三〇四打	四六、七九打
同　十三年 數量	一四、四九三兩	—	一四、四九三兩	—	一四、四九三兩	一四、四九三兩	八六、五〇八兩
同　十四年 數量	一一、五三打	—	一一、五三打	—	三、六九二打	三、六九二打	一六、五九九打
同昭和元年 數量	二六、三四一兩	—	二六、三四一兩	—	六、七六六兩	六、七六六兩	三三、一四七兩
同　二年 數量	一〇、四七六兩	—	一〇、四七六兩	—	六、七六六兩	六、七六六兩	一六、二四四兩

牛莊、安東、哈爾賓に於ける支那靴下移入高

年度	牛莊 綿製 數量	牛莊 綿製 價額	牛莊 綿ヲ除ク 數量	牛莊 綿ヲ除ク 價額	牛莊 計 數量	牛莊 計 價額	安東 綿製 數量	安東 綿製 價額	安東 綿ヲ除ク 數量	安東 綿ヲ除ク 價額	安東 計 數量	安東 計 價額	哈爾賓 綿製 數量	哈爾賓 綿製 價額	哈爾賓 綿ヲ除ク 數量	哈爾賓 綿ヲ除ク 價額	哈爾賓 計 數量	哈爾賓 計 價額	計 數量	計 價額
同大正四年	二、六四打	二、〇三一	一、〇九三	五、〇五〇	二、六四	二、〇三一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二、六四	二、〇三一
同九年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一、〇九三	五、〇五〇
同大正十年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二、六四	二、〇三一
同十一年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一、〇九三	五、〇五〇
同十二年	二、九三打	一、六六兩	二、八二打	四、七六兩	三、三五打	九、四三兩	六、八八打	九、四三兩	六、八八打	九、四三兩	六、八八打	九、四三兩	三、九〇六打	五〇、四一四兩	三、九〇六打	五〇、四一四兩	三、九〇六打	五〇、四一四兩	三、九〇六打	五〇、四一四兩

滿洲に於ける靴下類輸移出高

年度	大連 數量	牛莊 數量	安東 數量	哈爾賓 數量	計 數量	大連 價額	牛莊 價額	安東 價額	哈爾賓 價額	計 價額
大正四年	一打	—	—	—	—	海關金 一	—	—	—	—
同九年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同大正十年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同十一年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同十二年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同十三年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同十四年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和元年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同二年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同三年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同四年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同五年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同六年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同七年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同八年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同九年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同十年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同十一年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九
同十二年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同十三年	三四六	三六六三	一、三五五	一、〇四四	一、九三九	三、一三三	一、六六六	一、九三九	一、〇四四	一、九三九

年度	數量					價額				
	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正九年	一三八	—	—	—	一三八	二〇五	—	—	—	二〇五
同十年	四二四	—	—	—	四二四	六四一	—	—	—	六四一
同十一年	四	—	—	—	四	七	—	—	—	七
同十二年	六二九	—	—	—	六二九	七一七	—	—	一、七五二	二、四六九
同十三年	七八三	—	—	—	七八三	九七〇	三二四	一〇三三	七九	二、四一六
同十四年	一、三五三	—	—	—	一、三五三	一、〇五九	—	一、三三六	六五	二、一二四
昭和元年	三、六三一	一〇〇	一五	—	三、七三七	三、六五三	一一三	二〇	—	三、七九五
同二年	二、四九五	—	六五一	—	三、一四六	二、〇五四	—	七九一	—	二、八四五

但滿洲のメリヤス製品の輸出せられるものは綿製靴下のみである。

同上再輸移出高

年度	數量					價額				
	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計	大連	牛莊	安東	哈爾賓	計
大正十四年	三四打一擔	—	—	八〇打二擔	二九四打三擔	五一	—	—	五三	一〇四四
昭和元年	四九五打一擔	—	八八五打六擔	八〇打三擔	一四八〇打一〇擔	一四〇五	—	一、七九八	六八一	三、八八四
同二年	七六三打三擔	—	—	六四四打五擔	一三八六打八擔	六二七三	—	—	二四九七	八、七六九

五、手袋

滿洲は寒氣酷烈なるため莫大小製の手袋では十分に防寒の目的を達することは出來ぬ、從て其の需要額は比較的尠く唯勞働用の軍手の需要のみが稍大である。最近の莫大小手袋の輸入高は次の如くである。（數量對）

年度	國別	日本	英國	獨逸	其他	仲繼品	計
大正十三年		五八、五四八對	一四〇七〇對	九〇、一三八對	四、三四八對	六一三五對	七〇〇、三九九對
同十四年		七二五、七六五	一五、一七九	五九、一一〇	一、八〇〇	五七四五	八〇七、六〇九
昭和元年		六四九、七四三	二〇〇八八	三四五、五八四	—	二一七七	六九八、一四三
同二年		七五九、一五四	五七〇〇	五六、五九七	四八〇〇	一八五七五	八二四、八六六

同上價額（海關兩）

年度	國別	日本	英國	獨逸	其他	仲繼品	計
大正十三年		四七、五九九	六、二一八	一四、八三一	七一四	一四二四	七〇、七九七
同十四年		五八、八五九	六九、五九	一〇〇四、二九	六三七	四五六三	八一四、一六
昭和元年		六〇、一五〇	一五、三五	六九八三	—	四九九六	七三、六五四
同二年		六四、五九三	一、九三七	一二、六四九	三一三	七九一三	八六四〇三

但此の數字は大連の輸入高のみで、其他の諸港の分は判明せぬ。從て實際は此の數字より稍大である。

前表によれば輸入手袋中本邦品の占める割合は最も多く、昭和二年中には數量に於ては九割二分、價額に於て七割五分に達してゐる。之に次いで獨逸品、英國品が多い。而して各國品を價格別に見るに本邦品は平均一對に付兩の八仙四厘、英國品は三十四仙、獨逸品は三十二仙、仲繼品は四十三仙である。即ち本邦品が主として綿製の安物で、英、獨及仲繼品が毛製又は上等品に屬する事が察せられる。日本品は品質下級なるも價格低いために、將來の需要は相當增加するものと思はれる。

第二章　滿洲に於ける莫大小工業概說

一、概　說

滿洲は未だ其の開發十分ならず、產業的には猶農耕時代にあつて、原始的な自給自足を目的とする以上の近代的工業は甚だ不振なるを免れず、中南部支那に於ては相當盛大に營まれてゐる莫大小工業も滿洲に於ては其の發達の見るべきもの尠い。唯其の內の靴下製造工業のみは、需要が多く且又其の操作工程が簡單で小資本で營み得るために稍見るべきものあつて滿洲に於ける需要の大半を充してゐる。

一體莫大小工業の製品の主なるものとしては、莫大小生地、襯衣類、靴下、手袋、襟卷等を數へるのであるが、滿洲の如く工業未發達の土地に於て莫大小生地の如く、大資本、大經營を必要なりとするものゝ生產が不振なるは察知するに難く無く、今日其の生產は全然無い。襯衣類の製造も需要左程多くないのと、其の製作に際し釣付、襟付、及袖付等の諸工程を要し、其の製造機械も亦高價で多額の資本を要するために其の製造に從事せるものは無い。唯本邦より仕入れたるメリヤス生地を以て其の製造に從事してゐるのが、哈爾賓、奉天等に二三あるのみである。然も今日の處では其の技術拙劣で價格の割に品質著しく劣等で到底輸入外國品と競爭出來ぬ狀態にある。然し滿洲に於ける需要の增加、技術の進步につれて遠からぬ內に相當勃興するに非やと思惟され、其の將來は必ずしも絕望と見る事は出來ぬ。手袋は土地柄寒氣酷しくメリヤス製品を以てしては到底十分に防寒の目的を達し難い爲め其の需要多からず、

其の製造も不振で、靴下製造の傍ら勞働者向の軍手の生産が少しく行はれてゐるに止まつてゐる。襟卷も通常の支那農民には之を使用する風習も無く、唯僅に邦人、外人又は其等を模倣する都會地の支那人が使用するに過ぎず其の需要も微々たるもので、其の生産は殆ど無い。スウエター類も在住邦人及外人向の若干の生産あるも元より特に擧げるべき程の事は無い。

以上記述せる如く滿洲に於けるメリヤス製品中上述のものは何れも製造不振で見るべきものとしては唯靴下製造あるのみである。既に述べたる如く支那人は從來綿布製の韈子を用し來たつたのであるが、西洋靴下の體裁好く簡便で穿き心地好く且比較的割安なのを喜んで之を使用するもの漸次增加し、初めには奢侈品と見做されたものが今日では全く必需品として迎へられ其の需要は年々昂まりつゝある。然も其の製造は操作工程簡單で小資本で取りかゝり得るために、之に從事するもの續出し、一般的に工業の不振な現在の滿洲に於ける唯一の莫大小工業である。從て以下述べんとする處も自ら滿洲に於ける靴下工業の觀を呈するのも蓋し止むを得ざるに出づるものである。

最近の滿洲に於ける莫大小類需給の概要を見るに一年の莫大小生地及製品の輸移入高は約百八十萬圓（但し此の數字が完全なものに非るのは既に貿易の處で說明した通りである）而して其の輸出は無視し得る程の微量に過ぎず、然も其の生産は殆ど靴下一品に限られてゐると云ふ事が出來る。靴下のみについて見るに輸移入高約百萬圓、製造高約二百五十萬圓位で、卽ち需要の大半は滿洲製品で充たしてゐ、特に高級なシルケット、人絹、絹、純毛、婦人用、小兒用、歐米人及邦人向の物のみが輸入に俟つてゐ、一般支那人の日常使用するのは殆ど滿洲及支那本部の製品である。而して今日の處、靴下の使用は支那人間に相當普及され一般化されてゐるとは云へ、主として都會居住者に限られ、人口の大部を占める農民の多數は猶其の堅牢耐久の點からして舊來の韈子を穿てゐるのであるから、一般勞働者向の製品を作ることにより此等の間に販路を廣め得たならば本工業の將來は頗る有望なりと云はねばならぬ。

二、沿革及現時の主なる生産地

滿洲に於ける莫大小製造は其の歷史が頗る新らしく、大正元年安東に靴下工場が設立せられたのを嚆矢とする。同二年大連に、三年營口に起り、其後漸次發展し十一二年頃より急激なる發達を見、十五年頃が最も旺で最近は稍不況裡にある。今日滿洲に於て斯業の最も旺なのは營口、奉天及其間の各都市で哈爾賓が之に次いでゐる。次に各重要都市に於ける斯業の沿革及現況を見るに次の如し。

大連に於ては大正二年頃野崎某なるものが高尾式靴下製造機械を販賣すべく主として支那人に靴下の製造方法を敎授したるに端を發し、爾來支那人間に家庭的工業として經營せられ漸次發展を見るに至た。同五年頃彼等の內に上海より外國製の古機械を輸入して斯業に從事するもの現はれ其の後歐洲大戰の進展に連れ、輸入靴下類の市價奔騰したるため、益々斯業の發達を促し邦人中にも之が製造に着手する者を見るに至た。殊に大正八年同品の相場暴騰したる爲斯業熱勃興し漸く白熱化するに從ひ市中の二三の有志の發起の下に近代的工場を設置し大々的に之を經營すべく資本金百萬圓の滿洲メリヤス株式會社の設立を計畫した。當時滿鮮に於ける莫大小の消費量は一ヶ年二百二十萬圓を突破し其後益々增加すべき趨勢にありしを以て、獨り毛綿メリヤスの製造に止らず羊毛、駱駝毛の採集、洗毛、紡績、染色等をも行ひ最初は綿メリヤス肌衣、猿股、縫手袋、本毛織出手袋、綿靴下、コットン式シャツ、ズボン下、オー

バセーター、腰卷、腹卷、本毛襟卷等を一ケ年に七萬四千打、金額に見積り約百十四萬圓を生產する計畫なりしも、種々の事情のため遲々として進捗せざる內に大正九年春の恐慌來にて具體化せず其儘立消えと成た。爾後再び大規模のメリヤス工業を企圖するもの無く、大部分は家內工業として副業的に從事する者のみで然も之を繼續する者少く、例へば甲が廢業すれば乙が開業する等間斷無く開廢を繰り返へしてゐる。從て現在の大連に於ける斯業者は何れも最近の開業に係り且極めて小規模の生產を爲し居るに過ぎず、見るべきもの甚だ尠い。

營口に於けるメリヤス工業は民國三年逢源順が靴下製造に着手せるを矯矢とする。爾來漸次發展して工場を設立するもの相繼ぎ、民國十五六年頃最も發展し工場數百二十餘戸に及んだのであるが、昨年來動亂の影響、物價騰貴、通貨の不安定、供給過剩等の原因で稍不況に陷り工場の休業せるもの續出せしも猶滿洲に於ける大生產地たるを失はぬ。

遼陽城內に斯業が興たのは營口より一年遲く民國四年の事で現在七、八十の工場と四、五百人の職工が居、相當盛な地方の一である。附屬地に同工業が始めて興たのは近々昭和三年五、六月頃よりの事で、極めて小規模且幼稚なものである。

奉天に斯業が興たのは比較的新らしく大正六七年頃の事と思はれる。現在製造家は百數十戸を算し盛大なるも近時は營口と略同樣な理由で不況に惱み倒產休業するもの相繼いでゐる。

鐵嶺にては大正十一年頃鴻順大が創業し、其後洋韈子の需要の增加に連れ華興大(大正十四年開業)華公盛(昭和二年開業)の二家開業せるも何れも規模小で見るに足るもの無い。

長春に於ける莫大小工業(靴下製造)の最初のものは城內東三道街現有中興工廠經營主張子翔で卽ち民國十一年三月僅に二臺の靴下編機を購入して天津より一名の技工を招致して之れが製造を開始したるを濫觴とする。其の製品は靴下のみで其の規模の狹小、資本の不足、製品の不良のために業績擧らず、爾來二年間は辛うじて衣食する程度に其の業務を維持繼續して來たのであるが、一般支那人の各階級に靴下の需要激增し、然も從來其の市場を獨占せる上海、天津品が當時營口、海城、蓋平、遼陽、奉天等の南滿一帶に勃興せる斯業の製品に壓迫せられるを見て、前記の張子翔は「將來長春に於ても其の經營方法の如何によつては必ず有望なり」との確信を持し、資本家を勸說して十四年三月資金三千圓を投じて機械の增設、工場の擴張、經營組織の改善を斷行し全く陣容を一新して積極的發展の途上に第一歩を進めた。其の結果製品の品質も向上して南滿各地の製品に遜色なきに至り、自然需要も增大し生產費も輕減され、採算漸く有利になつた。而して他にも該事業の有利なるに着目する者生じ、同十五年一月資本金三千圓を以て福興長工廠(靴下、腿帶子、タオル、卷ゲートル等の製造)興り次いで同年三月裕慶工廠が資本金一萬五千圓(其の多くは不動產に固定)を擁して事業(靴下、タオル、手袋)を開始し、更らに十六年三月美華工廠、民業工廠何れも資本金三千圓を以て創業した。之を要するに長春の斯業は未だ勃興期にあり、大勢より見る時は未だ幼稚の域を脫せず、極めて小規模の家內工業に過ぎず、到底長春市場及其の背後地に於ける需要を充たし得ざる實狀にある。

安東に斯業が興たのは最も古く大正元年である。爾來漸次增加し、大正八九年頃より同十五年までを最盛期とする。現時は頗る不況裡にある。

吉林に斯業が創められたのは民國十一年の頃である。當時ミシンの代賣店たる勝家公司が靴下製造機械の一種を販賣してゐたのであるが、賣行極めて尠く僅に家內工業として營む者が在たに過ぎぬ。民國十三年當地城內德勝門內に

德勝里織機工廠なるものが設立され、勝家公司の持越した靴下機四十余臺を全部同工廠に賣渡した。同工廠も其後規模を縮少して買受けた四十臺中僅に十臺を殘して他は徐々に賣拂た。次いで北大街夾信子胡同に福利織機工廠が起り又北大街源記工廠、泰記工場等設立せられるに至た。尙靴下機を据付けたる家は十數戸あるも何れも上記各工廠に附隨して其の下註文をうけてゐるものである。之を要するに吉林に於ける斯業は甚だ不振なりと云はねばならぬ。

哈爾賓に於ける斯業の發達も比較的新らしく、大正五、六年の好況時代即ち歐米品の輸入激減し一方日本の粗製品殺到せし時代に其の源を發し、大正九年のパニックで一頓挫を來たし其の發達を阻止されしが大正十五年頃漸次回復すると同時に日々隆盛に赴き、今日にては其の規模の大なる點、機械の新式なる點、製品の優秀なる點で滿洲中最も進歩せる地であり又最も將來あるものと見られてゐる。

鄭家屯に於ては大正十三年春美興工廠が設立され、繼いで同十五年春公民工廠が出來た。何れも小規模の家內工業の域を脫せざるもので附近の需要の一部を充たしてゐるに過ぎぬ。

間島にては大正十二年一鮮人が資金二千圓を以て大阪より機械十八臺を仕入れ試驗的に製造を開始したるに其の成績極めて良好なりし爲に職工八九名を使用して靴下製造に從事せるを本業の嚆矢とする。爾來逐年同業者の數を增し同十三年に二箇所、十五年に一箇所昭和二年に二個所開業し、現在にては機械八十餘臺を使用して斯業に從事してゐる。而して今日に於ては技術進歩して輸入品に比し遜色無きに至てゐる。

齊々哈爾等北滿の都市には未だ斯業の勃興を見ぬものが多い。

之を要するに斯業は南滿の營口、奉天間の各都市に於て最も旺んで、漸次各地に波及し、最近に於ては哈爾賓以南の各都市に於ては之を見ざるものは殆ど無きに至てゐる。

三、生產規模

滿洲に於ける莫大小工業の規模は概して甚だ小さい。稀には數十臺の機械を設置して動力を用いて機械の運轉をしてゐるのもあるが其れは數へる程しか無く大部分は十臺以下の機械を以て極めて小規模に操業してゐるに過ぎず、中には僅二、三臺の機械で家庭內の副業としてゐるのもある。然して靴下製造の如く其の操作工程の簡單なものにあつては、小規模の家庭工業を必ずしも不利と斷ずる事は出來ぬ。勞銀が廉くて金利の高い滿洲に於ては多くの資本を固定せしめて大規模の生產を爲すよりは副業として余暇に營む方が却て有利である場合が多い。從て將來に於てももとより工場設備も漸次完備し大規模の經營が營まるゝに至るであらうが、此の從來の小規模經營も存續して行くものと思はれる。滿洲に於て多くの近代的工業が不振なるにも係らず、靴下工業のみが相當の發展を見てゐる最大の原因の一は、此の小規模の經營を必ずしも不利とせざる點が、資本主義の發達未だ十分ならず、大資本の集聚が困難なる今日の滿洲の經濟狀態に甚だ適切なるものあるためである。

資本金から見るに、前述の如く靴下工業は余り資本を要せぬもので最低六百元あれば事業を開始し得ると云はれてゐる。而して滿洲に於ける同業は我國又は中南部支那地方のそれに比すれば概して資本尠く一萬元以上のものは數へる程しかなく一千元以下のが最も多い。從て工場の設備も貧弱で据付機械數の最高七、八十臺で二、三十臺を有するのも稀で多くは十臺以下である。地方別に見て設備の最も整てゐるのは哈爾賓の夫れで、發達新しい丈に機械も新式で

製品の品質も最も良好である。營口、安東は其の歴史古いために機械も多くは舊式で其の經營規模も小さい。

斯業が必ずしも多くの資本を要さぬ事が滿洲に勃興せる最大の原因であるが、同時に又動もすれば濫設され易く、一時の好況につれて群少工場が濫造されて製品の過剩を來し、不當の競爭の結果共倒れになり、斯業の健全な發達を阻害する惧がある。

四、機械

工業未發達の滿洲に於ては機械類の製造は覺束無く、莫大小機械も外國よりの輸入に俟てゐる。其の滿洲に於ける輸入高、再輸移高、殘留高を見るに次の如きものがある。

滿洲に於ける編物裁縫用機械輸入高

港別 / 年度	大連		牛莊		安東		哈爾賓		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正四年	七〇台	海關兩 一九、八八四	台	海關兩 二、二四四	台	海關兩 七、一九二	台	海關兩 三、六六八	七〇台	海關兩 五、一九八
同九年	一	一〇、三〇七	一	三、九〇〇	一	一〇、五七八	一	六〇、一九七	一	一八、四九、八二三
同十年	一	九、三三五	一	六、七三九	一	一一、九五	一	四三、五一九	一	一五、六八八
同十一年	一	一〇、三三三	一	六、八六三	一	三五、三七〇	一	四七、三九四	一	一九、九六〇
同十二年	一	一三、二一三	一	二四、七五八	一	四三、八三四	一	二、七一九	一	一九、五二四
同十三年	一	九、七二七	一	一、八一三	一	一	一	一、六三二	一	一〇一、八二
大正十四年	二、五三六	七、八五〇	三六一	五、九四一	四八四	一五、四五六	一七	四、三五	三、三五八	九、六六三
昭和元年	五、八六八	一六〇、八六九	一六六	三、八三三	四一八	一三、一七六	一六	三三、三	六、四六八	一七、二一〇
同二年	四、二九六	一六〇、二八	一	五〇	五三	二、九〇〇	二九	一〇、一〇三	四、五六八	一七三、八〇

但大正十三年までは刺繍機械を含む。

滿洲に於ける編物裁縫用機械（ミシン及メリヤス機械）再輸出高

港別 / 年度	大連		牛莊		安東		哈爾賓		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正十四年	一四三九臺	海關兩 三〇、六九七	臺	海關兩 一、五〇九	四三臺	海關兩 一、五九八	二七臺	海關兩 一、六三三	一、三五八	海關兩 六〇、七六一
昭和元年	六九〇	一七、一〇三			三一	一、七五二	三五	一、六三三	七五六	一九、四一一
同二年	三五三	一四、五二一	一	五〇	三三	一、一八六	五〇	二、五八〇	四三六	一八、三三七

ミシン、メリヤス機械滿洲殘留高

港別 / 年度	大連		牛莊		安東		哈爾賓		計	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正十四年	一〇九七臺	海關兩 四一、一五三	三六一臺	海關兩 五、九四一	四四一臺	海關兩 一三、八五八	△	海關兩 一、八九一	一〇臺	海關兩 六〇、七六一
昭和元年	五、一七八	一四三、七六六	一六六	三、八三三			△	一、三〇一	一九	五、一三〇一
同二年	三、九四三	一四五、六〇七	〇	〇	三〇	一、七一四	一六九	七五、三三	四、一四三	一五四、八四三

貿易統計上メリヤス機とミシンとは同一項目に含まれ區別すること不可能である。而してミシン機の方がメリヤス機械よりは多いものと思はれるから以上の統計は餘り實際上の役に立たぬものである

昭和二年の滿洲輸移入メリヤス及ミシン機の仕出地は次の如し。

港別 ＼ 仕出地	大連 數量	大連 價額	牛莊 數量	牛莊 價額	安東 數量	安東 價額	哈爾賓 數量	哈爾賓 價額	計 數量	計 價額
日本	三四、六六	二八、海關兩 二六四	—	—	四八	二、海關兩 七九六	—	—	三四、七四	二〇、海關兩 九六〇
朝鮮	二四	一、三九	—	—	四	一〇四	—	—	二八	一、三八三
北米合衆國	三三	一、四六八	—	—	—	—	—	—	三三	一、四六八
獨逸	七、六六	五、一五七	—	—	一、六	二、一五七	—	—	七、六六	三五、一五七
計	四、一〇八	一五、〇六六	—	—	五一	二、九〇〇	—	—	四、二六〇	一五、九六八
上海	六一	二、九三三	—	—	—	—	—	—	六一	二、九三三
青島	一	三四	—	—	—	—	—	—	一	三四
天津	一、一〇四	一、一〇四	一	五〇	—	—	—	—	一、二〇四	一、一五四
計	八八	四、〇六〇	一	五〇	—	—	—	—	八九	四、一一〇
太平洋ロシア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	四、二六六	一六〇、三六	一	五〇	五一	二、九〇〇	二〇四	九、七八四	四、五三三	一七〇、八六三

以上の統計は種々の事を物語てゐるが其の多くはミシン機なるため、莫大小機械に對する結論を下す事は出來ぬ。

依て當業者の言其他によつて見る事にするが今日滿洲に於て使用せるメリヤス機械―殆ど全部が靴下機械であるが―は多く本邦の製品である。支那本部では英米品、獨逸品が相當使用されてゐるが、價格の關係上滿洲では極めて尠い。其の主なる種類は次の如くである。

東京巣鴨永田メリヤス機械株式會社の製品

大阪の西尾式、松浦式、松岡式

手袋製造の横機は永田社のが多い。

靴下機械の價格は一臺十圓乃至四、五十圓で二、三十圓のが最も多い。歐米品は稍高價なるため使用するものは稀である。動力を用いるもの尠いため始ど全部手編機である。

猶近年支那の工業が稍進歩せるためにや、本邦品を模倣して支那側の手で靴下機を製作して居るとの事である。遼陽では四年程前から特別の專門の工場は無いが鍛冶屋の手で巧に模倣して製造してゐると云ふ。同地の靴下製造者の言によれば、其の能率は本邦品と大差無く、價格に相當の開きがあるため需要旺であるとの事である。此外海城、奉天等にも若干ある模樣である。此の勢から見ると遠からずしてメリヤス機の製作も相當發達するものと思はれる。

民國十年より營口に靴下機械用の針の製造をなすものがあつて現在は次の三工場がある。而して其の一日の製造高約五千本、職工五十五人、創業未だ久しからざるために、其の過半數は猶未熟練工である。其等工場の概要を見るに次の如し。

名稱	所在地	設立年月	一日生産力	職工數
裕仁	大平康里大十字街	民國十年	二、〇〇〇本	二〇人
明星	估衣街	同十二年	二、〇〇〇本	二〇人
瑞德	小紅樓	同十四年	一、〇〇〇本	一五人

製針原料の鋼絲は多く大阪から來る。軌針の工作には電力を用ひ、磨くのは手でやる。今日營口に於けるメリヤス製造は相當旺であるから此の靴下用の針の需要は甚だ多く、斯業の將來は有望視されてゐる。

靴下工場に使用せられる職工の賃銀は特別の熟練工にあつては月給二十圓に及ぶものもあるが稀で、普通職工では月給八圓乃至十二圓(食費は傭主負擔)位である。而して支那人工場では少年勞働者を使用する事多く、二年乃至三年の年期で見習として一年二十五圓乃至三十圓を給し仕上け其他比較的簡單な作業に使用してゐる。

五、原料

滿洲に於て製造せられる靴下は何れも下級品なる爲、其の原料の大部分は綿糸で、毛糸は尠く一割にも達せず、絹に至ては殆ど皆無である。使用綿糸の產地は日本、支那各地及滿洲であるが本邦製品が最も多く、その大部分は在阪神華商の手により又は滿洲在住本邦商人の手を經て大阪より輸入されてゐる。上海、青島等の支那各地の製品は極めて尠く、滿洲の奉天紡紗廠、滿洲紡績、福紡其他の製品は相當使用せられ、殊に紡紗廠のは所謂「國貨」としての强味を持てゐる。瓦斯糸、シルケット等の加工綿糸は專ら本邦品である。我國の生產に係るシルケット十番手單糸、二十番手二合、三十番手二合、四十二番手二合及六十番手等を合して安東、營口、奉天の三地方に輸入せられる數量は奉天商工會議所の調査に依れば一箇年約二〇、〇〇〇俵、價額約九十萬圓に及んでゐる。原料毛糸も本邦品(日本毛織會社及尾州物)が最も多く、英國品、獨逸品の輸入も若干ある。又奉天の滿蒙毛織會社の製品も相當使用せられてゐるが、同社の製品は機械に掛けた際に縒が戻るとの不評が一部に存すると云ふ事である。

原料糸の色彩は黑、紅、青、藍、黃、褐、灰色等の單色が多いが、我國と異つて黑の需要は比較的尠い模樣である。以前は殆ど全部染色した原料を輸入してゐたのであるが、今日は多くの工場には染色場を有し其所で染上げてゐる。然らざるものも滿洲の染色工場で染色し、染色糸の輸入は稀である。滿洲に於ける斯業の發達、需要の向上につれ、原料も漸次高級品に移る傾向があつて、太番手物より細番手物の需要の增加率著しく又シルケットの需要は二三年來激增し、遠からずして人造絹糸の製品をも生產するに至るものと見られてゐる。殊に此の現象は哈爾賓に於て最も著しい。

六、滿洲の莫大小工業製品と其の競爭品

莫大小製品の現に滿洲に於て製造せられてゐるのは唯靴下あるのみである事は既に屢々繰り返へせる處である。從て現在の滿洲の莫大小製品の競爭品としては滿洲產の靴下に對する競爭品即ち支那人が從來から使用し來れる支那足袋即ち襪子と、他の地方で製造される靴下とを擧げれば足りるのである。次に其等と滿洲製品との優劣を比較して見る。

支那足袋即ち襪子は我國の足袋と酷似し、底は「襪底子」と稱する布の五六枚を重ねて縫ひ合はせたる恰も我國の雲齊織の如き厚みあるものを以てし、上面は靴下同樣指を分たず、大は普通七八寸で日本足袋と異る點はこはぜを附せずに唯中央部に一縫あるのみである事である。同品は頗る堅固で且價格も低廉なるためさなきだに舊慣墨守の傾向ある一般支那人は專ら之を使用し、西洋靴下即ち洋襪子の使用は普及されたりとは云へ現在の處は都會地及上流社會の使用あるのみである。此の襪子と靴下との優劣を見るに價格に於ては下級靴下の方が遙に廉いが、耐久力に於ては襪子は方が大分優てゐる。靴下は體裁好く一種の贅澤品として支那人の嗜好に適するも一方又襪子は都會居住者及上流階級以外に於ては多く自己の家庭內で仕事の余暇に製作してゐるのであるから、經濟的には廉價な靴下を買ふより却て有利である。之を要するに兩者には一長一短あるを免れぬが、今後の生活程度の向上且歐化の傾向に連れ、靴下の需要漸次增加の趨勢にあり、將來も亦此の狀勢を以て推移すべきは疑無きも、襪子の需要が急速に激減して直ちに靴下が之に代はるが如き事は無いものと思はれる。

次に滿洲製の靴下と滿洲に輸移入せられてゐる他地方の製品との優劣を見る。中南部支那で靴下製造が相當旺なるは前述の如くであるが其の代表たるべきものは上海のそれで、同地に於ては創業の歷史古く技術も進步し機械も新式なるため其の製品の品質も優秀で出來榮好く上流者向の高級品として相當滿洲に移入せられ就中墨菊花牌、延壽牌、鐵砲牌の三種は最も著名である。滿洲の製品にても上海製の名を冠してゐるのが尠なからずある位で支那製の高級品として獨自の地位を保てゐる。近來滿洲にも國貨提倡の聲旺んで將來益々甚しからんとしてゐるから上海製品の高級品としての需要は減退すること無きものと思はれるが、今日滿洲に於ける靴下の需要は多く廉價な下級品にあり、價格の點からは上海製品は到底滿洲製品に比敵出來ぬから一般向と云ふ事は出來ぬ。

次に外國製品と比較するに、今日滿洲に輸入される外國靴下は大部分本邦品で外に米國物、英國物、獨逸物等あるも極めて尠く特殊高級の絹、純毛製品若くは婦人用等で在滿邦人及外人の一部にのみ需要されてゐるに止まり格別問題とすべきものは無い。日本製品と滿洲製品との長短を見るに或る支那人は靴下に關して「單に體裁のみを主眼とし品質及價格を顧みざれば日本品にて差支無し、體裁及品質を撰び價格に顧慮せざれば西洋品にて可なり、又體裁を顧みず丈夫と安價なる點を主眼とし即ち實用向としては支那自國製品に限る」と云てゐるが、現に我國の靴下の滿洲輸入高が、滿洲に於ける靴下の需要激增の趨勢にも係らず停滯若くは減退の狀勢を示せるを見ても本邦品が支那品に壓迫されてゐる事を知るに難く無い。而して滿洲品が日本品に比し有利なりとする理由は次の如く

一、所謂國貨である事

二、廉價なること

三、日支人が嗜好を異にすること

等を擧げる事が出來る。

第一の點を見ると近時全支を通じて排外貨、國貨提唱の運動が旺で且從來のそれと異り根强く、永續的の傾向を有してゐる。然も日本品は其の際特に目標とされる事多く此點に於て甚だ不利なるを免れぬ。

第二に價格の點から見ても本邦品は不利である。卽ち滿洲は我國に比し工賃遙に低廉であり、又運賃を要せざること、關稅の負擔無き事（新關稅率正稅五分の外に綿製品は附加稅二分五厘、毛綿交織七分五厘、純毛及絹製一割二分

五厘）等の理由のために本邦品よりは遙に廉價につき價格の點で競爭出來ぬ。而して生活程度の低い支那人間に販路を覓めるのであるから、品質の優良なるよりも價格の低廉である事が最も望ましいのであるから此點が本邦品は滿洲品との對抗上甚だ不利である。猶參考のために滿洲に於ける靴下の生産費を見るに次の如くである。

場所	遼陽	
原料		一〇、三〇（円）
勞銀	製造　三人	一、〇〇
	仕上　三人	一、〇〇
同上食費		〇、六〇
計		一二、九〇
製造高	八打（一打一、八〇（円））一四、四〇	
差引		一、五〇

又長春に於ける生産原價及賣價

イ　毛綿交織（冬物）一打の生産原價

毛糸代	二、五二〇（円）（但し目方一四兩分）
綿糸代	一、〇六五（同　二八兩分）
職工加工賃	〇五錢（月給十二圓の職工一日八打製造するとして）
縫賃及原糸染色費	九錢
職工食費割掛費	二錢五厘（一日二十錢と見て）
計	金三圓七十五錢
賣價	金五圓乃至五圓二十錢
所得率	三割八分六厘

ロ　冬物（厚手）全綿製一打の生産原價

綿糸代	一、四〇錢（綿糸一玉九斤より四打生産、綿糸一玉五、六二五圓の割）
職工々賃	五錢
縫賃及原料染色費	一〇錢（染色費一玉二十錢の割）
職工食費	二錢五厘
計	金一圓五十七錢
賣値	金二圓五十錢
所得率	五割九分弱

ハ　春秋合物全綿製一打の生産原價

綿糸代	九十三錢八厘（綿糸一玉九斤より六打生産）
職工加工費	五錢

縫賃及染色費　三錢三厘
職工食費　二錢五厘
計　一圓四錢六厘
賣値　金一圓五十錢
所得率　四割三分四厘

ニ　夏物全綿（瓦斯）製一打生產原價

綿糸代　一圓五十九錢（瓦斯糸一玉八斤より八打生產一玉一二、七五錢の割）
職工加工賃　五錢
縫賃　五錢（既染色糸に付染色費不要）
職工食費　二錢五厘
計　一圓七十一錢五厘
賣價　二圓二十錢
所得率　二割八分五厘

ホ　手袋（冬物）毛綿交編一打の生產原價

毛糸代　三圓
綿糸代　一圓十錢
職工加工賃　十三錢二厘（一日一人三打製造）
職工食費　六錢六厘
計　四圓二十九錢九厘
賣價　五圓五十錢
所得率　二割七分九厘

第三に之は余り重要な點では無いが靴下に關しては支那人の嗜好は本邦人と異り、厚手の目のこんだ一見堅固相なのを好み、薄手な本邦品を好まぬ傾向がある。

以上の如き理由あるために本邦品の滿洲に於ける需要は始ど本邦人のみに限られる傾向あり、支那側の技術の進歩とゝもに將來に於ては益々甚しからんとするものと思はれる。

七、滿洲の莫大小工業の將來

滿洲の莫大小工業は概括的には甚だ不振であるが靴下製造のみは相當の發展を見てゐる、今日では下級品に於ては外來品を壓倒するに至てゐる。但最近の斯業界は通貨の不安定、物價騰貴、工場濫設による生產過剩等の原因により著しい不況裡にあり、工場閉鎖、倒產するもの續出してゐるが、元來が必需品として其の需要漸增の傾向にあるのであるから、技術の進歩、經營組織の改善につれ將來益々發展するものと思はれる。而して其の製品も從來の如く下級品のみに止まらず、相當高級品の製出を見、それに於ても外來品に壓迫を加へるに至らんとする氣運が動きつゝある。

次に現在は僅に二三あるに過ぎず、然も其の品質が劣惡で到底外來品と競爭出來ぬ襯衣類の製造も、遠からずして勃興するは疑無き處である。

之を要するに近時の支那側の工業熱は頗る熾烈なるものあり、莫大小工業の如く生活必要品で且比較的簡單な工程を以て生産し得るものが第一に注目されるのは明らかであるから斯業の將來は相當の發達を見るに至るものと思はれる。

附一　支那本部に於ける莫大小製造狀況

支那人がメリヤスの製造を初めたのは最近の事で、僅に二三十年の歷史を有するに過ぎぬ。而して其の初期に於ては技術拙劣で生産高も極めて微々たるものであつたが、需要の增加に促され其の勞働賃銀の低率と技術の熟練と相俟て漸次發達し、今日では廣く各地方に行はれてゐる。中南部支那に於ては特に旺で靴下に於ては外國品を壓倒してゐるが、就中上海を其の最たるものとし同地の製品は品質の優良を以て鳴り、全支に移出せられて一流を聲價を博してゐる。農商統計により支那のメリヤス類の生産狀況を見るに次の如し。

年度	製造戸數	職工數 男	職工數 女	職工數 計
民國元年	七四、三八八	一四、二五〇	一二八、四〇二	一四二、六五二
同二年	一〇、五四八	一七、一一二	六二、九二四	八〇、〇三六
同三年	九、六四九	一八、一三〇	二三、五三六	四一、六六六
民國四年	一四八、六一五	二四、四〇一	三五、〇五八	五九、四五九
同五年	一〇、三二九	一七、九〇七	二一、四二六	三九、三三三
同六年	一一、五七八	一九、七四〇	二九、〇七四	四八、八一四
同七年	一〇、九四〇	一二、七七五	四五、七七三	五八、五四八
同八年	二二、五六〇	九、五七九	四一、六八四	五一、二六三
同九年	一八、六四九	一三、二八八	二九、〇一八	四二、三〇六

同　生産品別

年度	襯衣類	手袋	綿製靴下	夏シャツ	タオル	其他	計
民國元年	七九〇、六八三円	五六、五八〇円	一、二〇五、二三四円	九四〇、八六七円	一、七五三、三九三円	三、三三〇、九四四円	一二、六九五、二一四円
同二年	一九一、七二八	一二、二〇四	九六、六八五	二五〇、六二四	一、六九八、三三四	四七、七、一三五	三、六九九、七四八
同三年	四二、八九一一	三〇、八二二	一、三六〇、六一九	二一七、六五七	一、八四三、七九九	五〇一、六一四	四、六七〇、八一二
同四年	九七一、二五五	二六七、九四二	一、五九〇、三八六	四〇一、六七九	二、一九八、一〇五	九九七、五六一	六、三六七、九二八
同五年	一、五一五、五九九	五一、八〇九	二、九一一、三四八	六〇八、八二七	二、〇一九、五九四	二、六九〇、〇三四	七、八四一、五〇一
同六年	六七七、三八五五	六八七、五八五	二、七一八、八七三	八六一、一二八	三三七、一八	一、三六七、一一〇	六、三四二、二七九
同七年	一、一九四、六一五	七二一、九九七	三、八四四、四一六	三三六、五三一	一〇七、〇四八	一、三八、九〇三	七、四三四、五一〇
同八年	九九七、六四九	一五四、四二一	三、七〇八、〇七六	二九三、〇〇五	一一〇、三一八	一、七二、一八四八	七、〇三五、三一七
同九年	一、五九六、五一六	一〇一、六一九	四、五〇六、九八八	一八四、六二八	二五九、五一八	二、三七二、二三三	八、九〇一、五〇三

次に地方別の生産高を見るに次の如し。（民國九年）

地方	製造戸數	職工數	製造價額
京兆	二六	四六三	七五、五五六
直隸	一二三	五三五	五三一、八〇五
吉林	一五	七七	九七七、一五六
山東	三七七	二、一四八	二八一、三九四
河南	八八	四五〇	一、五七〇、四五〇
山西	一四	四四	五、四九四
江蘇	一七、五七一	二九、三五六	五、一一九、二四七
安徽	四〇三	九九九	三〇五、三七一
陝西	二八	八、一一三	三四、〇五四
哈爾濱	四	一二一	九七五
計	一八、六四九	四二、三〇六	八、九〇一、五〇二

支那の農商統計の杜撰なるは定評のある所で以上の各統計にも直ちに容認し難い幾多の點が存する。然し民國元年を除いては逐年生産增加の傾向にあること、製品中では木綿靴下が最も多いこと、江蘇省に於て最も旺なる事等の事實は窺ひ得られる。

支那に於て莫大小類の需要の年々增加して行くのは前述の如くであるが、歐洲戰爭以前に於ては獨逸品が專ら之の供給に當てゐた。本邦品も價格の低廉なるため稍進出してゐたのであるが、大戰の突發により獨逸物の全く杜絕せるに乘じ、我製品が支那市場を壟斷してゐた。然し其の內でも操作工程の比較的簡單な靴下類が支那人の手で作られたのは相當古く、既に二十五年前から香港に興つてゐる。其の初期には生産高極めて微々たるものであつたが勞働賃銀の低率なると當業者の熟練と相俟て漸次發展し、今日では同地に於ても明治の末頃から本邦から機械を輸入して靴下製造を行ひ來たつたが、其れは小規模の家內工業に止まつてゐたのであるが、大正二年松江府に（履和）と稱する靴下工場設立せられ資本金數萬兩を以て約百臺の獨逸製靴下製造機械とゴム機械二十臺を購入して製造に着手し、良好の成績を收めてゐた。又同三年に上海の北河南路に（利華）なる靴下工場設立せられ資本金數萬兩を以て米國製靴下機を用ひ製造に着手し、更に同年松江に（泰和）と稱する靴下工場與り獨逸製機械百臺を用ひて製造を開始する等斯工業は俄然勃興した。此の傾向は支那各地に波及し、其の製品も他の支那の近代的工業品とは事變り價格の低廉なるのみならず品質亦良好なるため本邦品の販路は著しく阻害せられ最近に於ては特殊品、高級品以外は支那市場より驅逐されるに至た。靴下以外のものは其の使用の一般化されぬのと、操作工程複雜で大資本を要するために其の製造も概して不振であるを免れぬ。然し近時支那の工業熱は凄まじいものがあるから其他の莫大小製品の製造に於ても遠からずして相當の發達を見るに至るものと思はれる。

附二　我國に於けるメリヤス工業及其貿易狀況の概要

莫大小類は其製法比較的簡單で容易に製造する事が出來る。我國に初めてメリヤスのシャツが輸入されたのは明治三年であるが、直ちに其の模倣がなされ、同五年には米國へ、同六年には清國へ輸出するに至たと云ふ事である。此は其の價格不廉なりしため間も無く杜絶せしも、明治十七年に至り技術大いに進み、國內に於ては外國品を壓倒するに至り漸次國外へ輸出されたのであるが、日露戰戰爭後は益々旺に成り、歐洲大戰後は單に東洋の市場を獨占するに止まらず、歐米諸國まで輸出するに至た。現在に於ける我國のメリヤス工業の生產高其他を擧ぐれば次の如く、即ち昭和元年末に於て製造場は三、三九八で、內大阪の一、二六四最も多く、東京の五〇一、愛知の四二四等之に次いでゐる。職工數でも總數二五、二五二人中大阪は一〇、〇八九人を占め、東京の三、九〇一人、愛知の三、〇六〇人等之に次いでゐる。

總生產額は五五、〇五三、六六八圓で原料別に見ると綿製品が最も多く三八、四四二、五三〇圓即ち七割に及んでゐ、毛及毛綿は一四、七〇五、三四五圓で二割七分弱で之に次ぎ、絹は尠く九一六、一一六圓で總額の一分五厘にしか當らぬ。

其他の原料を使用するのは最も尠く九一六、一一六圓で一分五厘に足らぬ。

又製品別に見るにシャツ及ズボン下が最も多く三二、二六一、六七九圓で五割八分六厘に及んでゐる。靴下は之に次いで一一、一五二、三〇一圓で二割、手袋は遙に尠く三、五一六、七八〇圓で全體の六分强に止まる。即ち過半はシャツ及ズボン下である。

次に貿易上から見るに、メリヤス製品は今日我國が立派に自給し得るのであつて唯特別の高級品が英吉利等から輸入されるものあるに止まる。即ち輸入には格別の事無く問題となるのは輸出であるが最近三年の輸出高を見るに次の如し。

綿メリヤス肌着

	數量	價額
大正十三年	四、七一七千打	一九、八七三千円
同十四年	六、一九三	二七、九四七
昭和元年	五、九六一	二三、〇七六

メリヤス製手袋

	數量	價額
大正十三年	二二八千打	四二七千円
同十四年	二〇三	四四五
昭和元年	二八〇	五〇五

メリヤス足袋

	數量	價額
大正十三年	八三〇千打	一、六六一千円
同十四年	一、一五一	二、四八六

昭和元年	一、三〇八	二、三二三

以上三品の昭和元年の輸出高は二五、九〇四千圓で本邦莫大小製造高の半分に近いものである。而して其の輸出先は支那が一、七五七千圓、關東州が六九〇千圓、香港一七六千圓、英領印度八、八六二千圓、蘭領印度一、八五三千圓、比律賓諸島三、三七九千圓等である。

第三章　滿洲各地に於ける莫大小工業の現況

一、大　連

當地は斯業が起たのは大正二年頃である事は既述の如くであるが、其後餘り發展せず、今日に於ても全部小規模の家庭工業として經營されるものゝみで其の製品もスウエター、手袋、靴下、小兒服等で、スウエター、小供服は邦人の註文により製作し、手袋、靴下は綿製の下級品で主として支那人間に需要されてゐる。その主なる工場の內容を見るに次の如し。

イ　メリヤス工場

所在地	大連市若狹町一六四番地
開業年月	大正十五年十月
資本金	金約二千圓內外
經營者	靑木兼藏
製品の種類	セーター及肌衣類
機械臺數	和製大橫式三臺、獨逸製ミシン機械一臺
生產高	得意先の註文により生產する關係上一定せざるも一ケ年を通し約六千圓乃至一萬圓內外

從業員　家族全部を加へて六名
原料　日本製エビス印或はゼットシー三二分の二、二〇分の二、獨逸製P一六八番
因に和製の機械は一臺百五十圓乃至三百圓見當なりといふ。

ロ　イワキ屋
所在地　大連市磐城町六七番地
開業年月　昭和三年五月
資本金　約三千圓
經營者　森安太郎
製品の種類　セーター、肌衣類
機械臺數　和製大横式三臺(三臺にて附屬品付約千圓)
生産高　註文により生産する爲め生産高一定せず
從業員　家族を加へ三名
原料　日本製エビス印或はゼットシー

ハ　藤井商店
所在地　大連市壹岐町四五番地
開業年月　昭和三年四月
資本金　約三千圓
經營者　藤井喜太郎
製品の種類　セーター、小供服、靴下
機械臺數　大横式一臺、手廻靴下製造機械十四臺
生産高　セーター及小供服は註文により生産するを以て生産高不明なるも靴下は一ヶ月約三百打
從業員　七名
原料　毛糸日本製エビス三十番、ゼットシー二十番、綿糸十六番、二十番、瓦斯糸三十二番、四十二番
靴下の商標は平和印と稱し綿糸製大部分を占め一打二圓五十錢より三圓見當のもの多く主として支那人方面に供給し居れり。

ニ　三鈴洋行
所在地　大連市萬歳街一三番地
開業年月　昭和二年一月
資本金　約五千圓
經營者　土居清三郎
製品の種類　手袋(軍手)

機械臺數　永田式十五臺（一臺百二十圓）
生産高　一ヶ年約五千打
從業員　十五名
原料　漢口綿糸十番手、稀に十四番手を使用することあり

同工場は元來紐の製造を本業とし軍手は其の副業に過ぎぬ滿洲に於ける軍手の消費量は概算五萬打と稱せられ從つて十分規模擴張の餘地あるも原料の變動激しく而も之をカバーする方法なきを以て素りに機械を增設し難き狀態にあるものゝ如く同工場にて生産する軍手の卸値は現在百八十匁一圓五十錢、二百匁一圓六十五錢、二百四十匁一圓九十錢にして二百匁大部分を占め百八十匁と二百四十匁は註文以外は生産せぬ、尙ほ製造能力は一人一臺に付一日六打見當なるも內地の熟練したる職人は八打を生産するといふ。

ホ　福順工廠
所在地　大連市岩代町
開業年月　昭和三年四月
資本金　約二千元
經營者　任玉明
製品の種類　靴下（玉馬牌、壽星牌）
機械臺數　日本製機械五臺（一臺二十圓見當）
生産高　一日七打乃至八打
從業員　四名
原料　滿洲福紡會社製綿糸二十番、十六番手

同工場の製品は大連にて賣捌き卸値一打一元乃至二元內外にして專ら支那人に供給し居れり。

ヘ　榮寧洋襪工廠
所在地　大連市泰山街三一二番地
開業年月　昭和三年四月
資本金　不明
經營者　林秀堂
製品の種類　靴下（藍獅球牌）
機械臺數　日本製手廻機械三臺
生産高　一日五打乃至六打
從業員　四名
原料　日本綿糸二十番手

製品の卸値は上物一打二元、下等物一打一元內外にして主に當地に於ける支部人方面に賣捌き居れり。

ト　新光洋行

所在地　大連市福星街四五番地
開業年月　昭和三年
資本金　不明
經營者　王春義
製品の種類　靴下（ボート印）
機械臺數　日本製手廻機械三臺
生産高　一日四打乃至五打
從業員　六名
原料　日本製綿糸二十番手
製品の卸値は上物一打二元、下等物一元内外にして專ら大連市内に賣捌き居れり。

チ　餘慶永

所在地　大連市福星街二四四番地
開業年月　大正十五年二月
資本金　小洋銀一千五百元
經營者　張貽琮
製品の種類　靴下、一定の商標無し

機械臺數　日本製手廻機械三臺
生産高　一日約六打乃至七打
從業員　四名
原料　日本製綿糸二十番手
販路　大連市内
卸賣値段　女用一打一元八角、男用二元内外

リ　平和商會

所在地　大連市泰安街一六六番地
開業年月　昭和三年四月
資本金　小洋銀約六百元内外
經營者　孫良臣
製品の種類　靴下（三菱印）軍手（富印）
機械臺數　日本製手廻機械六臺
生産高　靴下及び軍手各一日五打内外
從業員　六名
原料　日本製綿糸二十番手を主とす

製品の販路は主として大連市内の支那人方面なるも若干日本人方面へ販賣することあり、卸賣値段は靴下上物一打金三圓内外、下等品一圓五十錢内外、軍手上物一打一圓八十錢、下等品一圓二十錢。

ヌ　源祥泰

所在地　大連市王陽街三一二番地
開業年月　昭和三年二月
資本金　小洋銀一千五百元
經營者　王清源
製品の種類　婦人用靴下(荷花印)
機械臺數　日本製手廻機械六臺
生産高　一日二、三打
從業員　六名(十五、六歳の子供)
原料　日本製綿糸四十二番手を主とす

同店は元來雜貨商にて靴下製造は副業とし製品は附近の支那人に販賣するに過ぎず卸賣値段は一打一元二三角内外とす。

ル　政和公

所在地　大連市大龍街四四番地
資本金　金七百圓内外
開業年　昭和二年
經營者　張九如
製品の種類　靴下(政印)
機械臺數　日本製手廻機械五臺
生産高　一日十打内外
從業員　六名
原料　日本製綿糸四十二番手を主とす

同工場は西崗街一四五番地に在る雜貨商政和公と同一經營者にして製品は同雜貨店に於て大連市内に發賣し、卸賣値段は一打約金一圓三十錢内外とす。

ヲ　福記棧

所在地　大連市東關街一八番地
開業年　昭和二年
資本金　小洋銀六百圓内外
經營者　李建寅
製品の種類　靴下(軍艦印)

機械臺數　日本製手廻機械二臺
生産高　一日約三打
從業員　二人
原料　日本製綿糸十六番手

同店元來雜貨店で靴下製造は副業で製品は同店に於て附近の支那人に賣捌いてゐる。其の卸値段一打約一元六七角内外。

當地の製品は工場設備の不完全、職工の技術未熟なる爲め製品の仕上惡しく體裁の點に於ては到底輸入品と比較出來ず、綿製の下級品のみ製造されてゐる。

而して此等は專ら下級支那人に供給してゐるのであるが、下級品の需要は關東州内よりも寧ろ奥地に多く從て大量に生産せんとする際には其の販路を奥地に求むる必要がある。然る莫大小工業――其内でも最も需要のある靴下工業は――他の工業に比し僅少な資本、簡單な設備で開始し得るを以て消費力の大なる滿洲の各都市例へば奉天、營口、遼陽、鐵嶺、哈爾賓等到る所に既に支那人向の靴下製造工場が設置され殊に奉天、哈爾賓等に於ては進歩せる機械を設置し以て相當大規模に生産してゐる。而して又當地に於て同樣に大量生産を爲さんとするに多くの不利な點があつて困難である。即ち當地は自由港なるため工業の進歩せる日本及其他外國の製品が無税にて輸入せられ、其の壓迫を被るのみならず、奥地に販路を求めるに際しては輸入税と運賃の負擔なさゞるべからざる事になる。即ち技術進歩せる輸入品、關税の障壁に護らるゝ滿洲各都市品に前後から壓迫せられる事が大連の莫大小業不振の原因で近き將來に於て當地の斯業の大發展を期待することは困難である。

二、營口

營口に莫大小工業が創始されたのは滿洲としては古い方で民國三年である。爾來漸次發展し今日では斯業の最も旺な地方の一である。其の製品の種類は殆ど靴下のみに限られ外には手袋工場が一あるのみである。而して生産の規模は小で家内工業の域を脱せず、機械も亦舊式で、其製品の品質は良好ならざるも工賃其の他の諸掛り低廉なるため價格も割安で一般下級民に歡迎され、當地以外の滿洲各地一帶に販路を有してゐる。

當地に於ける莫大小工業の概略を擧げれば次の如し。

	靴下	手袋
工場數	六一	一
機械臺數	八〇九	二
勞働者數	九六九	三
生産能力	一人一日約四打	機械二臺で一日五打
生産高（一ヶ年）	約三十萬打	約一千五百打

此等工場資本金、機械臺數其他の内容を擧ぐれば次の如し。

工場名	經營者	資本額	機械臺數	勞働者數	設立期	製品種類
振源永	高作文	三〇〇	四	四	民國十五年二月	靴下
元記工廠	路善臣	五〇〇	六	七	同年四月	同
萬春廠	鄭萬春	一、〇〇〇	八	一二	十四年八月	同
立安廠	王蔭南	一、〇〇〇	一〇	一四	十一年八月	同
福順成	王思治	三五〇	六	一〇	十六年五月	同
同聚生	毛之鳳	一、五〇〇	一三	一八	十三年三月	同
順大興	董春圃	五〇〇	九	一二	十六年七月	同
興順盛	孫官明	五〇〇	七	九	十三年五月	同
人和工廠	宋子賢	一、〇〇〇	一二	一五	十七年六月	同
同人泰	孫安	一、五〇〇	一二	一五	十六年十月	同
義慶讙	高義亭	三〇〇	七	七	九年五月	同
新裕廠	姜宗喜	五〇〇	一〇	一〇	十五年四月	同
東順廠	趙維池	五〇〇	一〇	一〇	十七年二月	同
公益合	周煥亭	三、〇〇〇	二〇	二〇	十二年三月	同
義和昌	葛家義	一、〇〇〇	一六	一八	十五年三月	同
同泰祥	張耀東	三、〇〇〇	二二	二五	十七年六月	同
萬順長	張德之	一、〇〇〇	二〇	二〇	十四年三月	同

元勝廠	曲亨華	五、〇〇〇	一〇	一四	十五年七月	靴下
裕盛廠	李大民	一、〇〇〇	一一	一三	十五年二月	同
東生廠	王欽早	一、〇〇〇	一〇	一〇	十五年四月	同
廣發成	王裕成	五、〇〇〇	五〇	五〇	十三年三月	同
日勝廠	孫魁五	三、〇〇〇	一五	二〇	十一年三月	同
永康號	劉永純	一、〇〇〇	五	七	十七年三月	同
興盛東	李雲生	四〇〇	一〇	一四	十七年四月	同
天利信	李賓什	一、〇〇〇	八	八	十七年三月	同
成順工廠	吳子善	二〇〇	四	四	十七年三月	同
日升工廠	劉兆浦	一、〇〇〇	五	七	十七年六月	同
中興工廠	潘賓忠	五〇〇	一二	一五	十三年四月	同
福源慶	邊彥甫	一、五〇〇	三	三	十七年九月	同
泰文裕	李文軒	三、〇〇〇	四	四	十七年九月	同
裕豐元	于子九	六、〇〇〇	一〇	一〇	十七年七月	同
永興法	吳潤庭	五〇〇	一二	一八	十四年七月	同
鴻興長	廉鏡波	一、八〇〇	一二	一二	十四年二月	同
永盛金	高玉堂	一、〇〇〇	一五	二〇	十二年九月	同
瑞和成	王瑞增	二〇〇	二〇	三〇	十三年八月	同
瑞成工廠	郭子湯	二、〇〇〇	二六	二九	十六年八月	同

歐羅巴	王瑞昌	五〇〇	二〇	二八	十六年八月	靴下	
義和工廠	揚輔臣	一、〇〇〇	一〇	一〇	十三年七月	同	
德興厚	劉景亮	一、〇〇〇	二〇	二〇	十三年三月	同	
東升工廠	魏星五	一、〇〇〇	二〇	二〇	十六年三月	同	
同安工廠	史東垣	二、〇〇〇	四〇	五〇	八年十月	同	
裕豐厚	揚序庚	五、〇〇〇	五	七	十七年二月	同	
興利號	孫廣德	一、五〇〇	一五	一七	十七年三月	同	
美利廠	魏漢三	一、五〇〇	三〇	三〇	十一年九月	同	
同利工廠	李葉卿	二、〇〇〇	三二	四〇	十五年三月	同	
富益隆	孫緒臻	五〇〇	八	一〇	七年二月	同	
萬順隆	李子陽	二、〇〇〇	一〇	一二	十六年七月	同	
公大工廠	呂芝田	五〇〇	三〇	四〇	八年五月	同	
信記工廠	高明閣	五〇〇	四〇	五〇	十七年二月	同	
天盛工廠	孫永地	一、〇〇〇	二	二	十七年九月	同	
寶聚生	張金寶	五〇〇	三	五	十七年二月	同	
永吉號	趙蘭祥	二、〇〇〇	一二	一八	十四年三月	同	
天寶源	孫星源	一、〇〇〇	四	四	十六年三月	同	
德順興	孫振卿	五〇〇	二	二	七年一月	同	
福源隆	揚秀峰	四、〇〇〇	一〇	一〇	十六年四月	同	
德興長	揚竹坡	五〇〇	五	五	十六年八月	靴下	
永長興	欒順五	五〇〇	七	一〇	七年五月	同	
福順義	龍鳳池	五〇〇	八	一〇	十五年六月	同	
福興隆	李子周	三〇〇	八	一一	十六年九月	同	
逢源順	趙陶松	一、五〇〇	一二	一四	三年九月	同	
公順成	王子賀	二、五〇〇	二二	三〇	十三年二月	同	
日勝廠	孫魁五	三、〇〇〇	二	三	十七年三月	手袋	

但各工場資本金は總商會に屆出てたる數字にして徵稅の關係上實際より相當勘き模樣である。

當地の莫大小工業は沿革古く滿洲に於ける大產地の一で民國十五六年頃最も盛大を極めたのであつたが、昨年來、內には動亂による通貨の暴落、諸物價並に工賃の騰貴、不當な重稅の賦課等により生產費の增大し、一方外よりは大量生產による精巧品が安價に輸入され當地の斯業者も漸く苦境に陷り、小資本の者は著しい打擊をうけ休業するもの相繼いでゐる。此の窮境を切り拔けるためには資本を增加して大規模組織を以て大量生產による事が必要なりと認められてゐる。

三、遼陽

當地も靴下工業の相當旺な土地で、城內には工場約七八十、職工約四百人ある。而して經營規模小で機械亦舊式なのは營口と大同小異である。同附屬地に於ては昨年中に二工場の設立ありしに止まる。其の內容は次の如し。

名稱	志誠商店	振興恒製襪工廠
經營者	李景華	馬明良
工場數	一	一
資本額	約一、〇〇〇圓	約一〇〇圓
設立期	昭和三年五月	昭和三年六月
製品	靴下のみ	同上
機械臺數	一〇臺	四臺
勞働者	一九人	六人
生産能力	一臺一日平均二打	同上

此の二工場て一箇年約一、〇〇〇打の靴下を生産してゐる。一打の價格普通品約一圓十錢である。

四、奉天

當地も莫大小工業は相當旺んで殊に營口に比すれば經營規模の大で機械も新式なのを使用してゐるのが尠くないが、大部分は家庭工業の域を脱せぬ事は他の滿洲各地と同樣である、製品は矢張り殆ど全部靴下で當業者は大小取り混ぜて百數十戸あり、外には毛糸を原料とするスエター製造者が約十戸を算するに過ぎぬ。其の主なる工場の內容を見るに次の如くである。

日本人側工場

店名	濱本商店	滿蒙商會	陸前屋
所在地	紅梅町三三	浪速通二三	紅梅町八
營業主	濱本權七	松永憲藏（代表者）	伊藤祐丘
資本金	六、〇〇〇圓	一〇、〇〇〇圓	—
設立期	大正十年一月	昭和三年六月	大正十四年
生産額	靴下（綿製）一、〇〇〇打	靴下 九、〇〇〇打	靴下 一〇、〇〇〇打
	靴下（毛製）七五〇打		
	手袋（工業用）二、五〇〇打	手袋 一、〇〇〇打	手袋 二、〇〇〇打
	手袋（毛糸）六〇〇打	手袋 五〇、〇〇〇圓	
	ジヤケツ —	ジヤケツ 一〇〇打	ジヤケツ —
機械數	横編 五臺	靴下 二臺	靴下 一臺
	靴下 一〇臺	一〇臺	九臺
	ジヤケツ機 —	三臺	—
職工數	一〇名	二一名	—
生産能力	現在の四倍	靴下 一五、〇〇〇打 手袋 三、〇〇〇打 ジヤケツ 二、〇〇〇打	當工場は目下研究中にて機械は一日二臺位運轉するに止めてゐる

支那人側工場

店名	大豐隆洋襪工廠	第一針工廠	天興隆	湧興成洋襪工廠	萬發成
所在地	城内鼓樓南	大北關神樹胡同	胡樓北木行胡同	鼓西胡同	木行胡同
營業主	慶祥厚、李鳴山				
責任者	田瑞周	張子肅	張子清	劉疊波	劉儒發
資本額（固定）	一五、〇〇〇（現大洋）	五、〇〇〇			
資本額（流動）	二四、〇〇〇	二五、〇〇〇	二、〇〇〇		
設立期	民國九年八月	同十年三月			
製品	靴下、手袋、腿帶子	靴下、タオル、腿帶子	靴下	靴下	靴下
全生産額	三二〇、〇〇〇（現大洋）	二六五、〇〇〇			
機械	六五臺	六〇臺	三〇臺	三〇臺	三〇臺
職工數	四二名	三二名			
動力		電動機使用			

奉天に於ける靴下製造は民國十五六年頃最も旺であつた最近に至り其の販路の思はしく無いために資本金の薄弱な工場は操業中止の止む無きに至てゐる。其原因は大體營口と同樣であるが、要するに工場の濫設と、眼前の利益のみを貪て品質の向上を無視せる結果であるが、元來同品は必需品であり且滿洲の生産高は其の需要を充たし得ざるもので

あるから此等の弊を改めたならば其の將來は頗る好望なりと見られる、最近當地に於ける支那側の工業熱は頗る旺で、諸種の新事業が企劃せられてゐるがその内に資本金五〇、〇〇〇圓の株式組織を以てメリヤス、靴下、手袋の製造を目的とする莫大小工廠の設立が吳双林等により計畫されてゐると傳へられてゐる其の内容は未だ詳かならざるも近い將來に於ては斯る計畫は陸續として實現されるものと思惟される。

五、安東

當地は滿洲中にて莫大小を製造した最も古き土地なるにも係らず其後餘り發展せず今日に於ても靴下が僅かに生産されるに止まる。即ち工場十一、一箇年の生産高約五三、九〇〇打にして價格約八九、六〇〇圓、一工場當り平均四、九〇〇打、八、〇〇〇圓である。其等の工場の内容を見るに次の如し。

工場名	所在地	經營者	資本金	開業	機械數	一日生産高
晋興恆	財神廟街	生海山	三〇〇〇元	大正六年二月	二〇	二〇打
協勝東	同	湯士章	四〇〇〇	同十三年五月	八	二〇
同義順	于宗溝	劉希堯	三〇〇〇	同十四年九月	五	二〇
同裕和	廣濟街	劉從周	一、五〇〇	同十年八月	六	七〇
德興恆	興隆街	王明光	七五〇	同九年九月	七	六〇
永合長	新豐街	郭永圖	一、一〇〇	同元年一月	七	五〇

店名	昭和三年原料高	價格	昭、三、生産高	價格	職工數	工賃
福成	債三〇	八六〇〇元	五五〇〇打	一三八〇〇元	一三人	一打ニ付一角ニ
德成	六	二四〇〇	一、二五〇	四、二〇〇	一七	同
三襄	四	一八〇〇	一、一三〇	三〇〇〇	七	月給七元—十二元
振興	三〇	八九〇〇	五、六〇〇	一六〇〇〇	一六	同
福昌	三〇	九、三〇〇	五、五五〇	一三〇〇〇	一五	同
計	一		四、七六〇	一三、〇〇〇	一〇	同
晉興	債三〇	八六〇〇元	五五〇〇打	一三八〇〇元	一三人	一打ニ付一角ニ
協勝東	六	二四〇〇	一、二五〇	四、二〇〇	一七	同
同義順	四	一八〇〇	一、一三〇	三〇〇〇	七	月給七元—十二元
同裕和	三〇	八九〇〇	五、六〇〇	一六〇〇〇	一六	同
德興恒	三〇	九、三〇〇	五、五五〇	一三〇〇〇	一五	同
永合長	一七	六八〇〇	四、七六〇	一三、〇〇〇	一〇	同
福成遠	一〇	四三〇〇	二、八五〇	七〇〇〇	八	同
德成齊	五	二〇〇〇	一、三五〇	三、五〇〇	七	同
三襄福	五	一六〇〇	一、一五〇	二、九〇〇	一〇	同
振興庚	四	五六〇〇	三、七〇〇	九、三〇〇	一六	同
福成遠	中富街李慶祥	四〇〇〇	大正十五年一月	二四	五	九五
德成齊	同李相臣	一、〇〇〇	同七年一月	三〇	五	八五
三襄福	縣前街楊慶有	一、二〇〇	同十四年六月	三〇	八	三五
振興庚	二番通六丁目于子濟	一、四〇〇	同十四年四月	三五	六	三五
福昌和	三番通九丁目程義欽	一、〇〇〇	同十四年七月	三五	八	三五
計		三、一五〇		三四	五	三四

福昌和	七	二八〇〇	一、九五〇	四、九〇〇	一〇	月給七元—十三元
計	二七	五三、九〇〇	三五、二〇〇	八九、六〇〇	一四九	同

當地の斯工場は大正八九年頃より大正十五年迄を全盛期とし、現在は各地不況の影響をうけ業績振はず各工場とも纔に收支を償へる程度に止まてゐる。

當地製品の仕向地は岫巖、大孤山、臨江、長白、莊河地方で總產額中十分の六乃至七は此等の地方には向けられ他は安東で消費されてゐる、當地の斯業は背後地の狹い弱點ある上に其の機械甚だ舊式なるため能率擧らず其の改良を圖らざる限り將來の發展も見込薄きものと思はれる。

六、鐵　嶺

當地の莫大小製造は甚だ不振で、僅に工場三あるのみで、靴下の下級品を當地及附近に供給してゐるに過ぎぬ。其の工場の內容は次の如くである。

（イ）工　場　大　要

名稱	經營者	資本金	設立期	製品の種類	販路	所在地
鴻順大	田雅軒	一、〇〇〇現大洋	大正十一年	靴・下	鐵嶺法庫	東門外
華興大	柏俊卿	八〇〇	同十四年	同	同	同
華興盛	祝興周	六〇〇	昭和二年	同	同	同

（ロ）工場設備

	機械						
	臺數	機械名	製造地	價格	勞働者數	製造能力
鴻順大	八	二臺 花旗牌 東洋式	米國	五〇元—六〇元 三〇—三五	八	一日十二時間 一人五打
華興大	八	一臺 花旗牌 東洋式	米國	五〇—六〇 三〇—三五	八	同
華興盛	六	一臺 花旗牌 東洋式	米國	五〇—六〇 三〇—三五	六	同

（八）全生産高

	製品の種類	數量	價額
鴻順大	靴下	三〇〇〇斤	五四〇〇元
華興大	同	四〇〇〇	七二〇〇
華興盛	同	二〇〇〇	三六〇〇

七、長春

當地の莫大小製造業は極めて最近の發達に屬し、今日猶黎明期にあるもので、從て現在の處甚だ旺なりとは云ひ難く到底奉天、營口、哈爾賓等に比する事は出來ぬ。現在當地にある莫大小工場は五で何れも靴下、手袋の製造を營みつゝある、其の内容は大體次の如きものである。

	裕慶工廠	福興工廠	中興工廠	美華工廠
所在地	商埠地西四馬路	城内西二道街	城内東三道街	城内西二道街
經營者	宋渭遠	李玉山	張子翔	王馨遠
創設年月	民國十五年三月	十五年一月	十一年三月	十六年三月
資本金	金貳萬五千圓	三千圓	三千圓	三千圓
使用職工	二五名（内熟練工七名）	一〇名（内熟練工四名）	一六名（内熟練工八名）	一四名（内熟練工八名）
機械臺數	一臺	八臺	一臺	一〇臺
同種類	手繰毛綿交編用 手繰全綿用 手繰綿編用	手繰毛綿交編用 手繰全綿交編用	手繰全綿編用	手繰毛綿交編用 手繰全綿編用
同製造國	日本製	日本製	日本製	日本製
同價格	靴下用二五—三〇圓 手袋械一二〇圓	二五—三〇圓	二五—四〇圓	二五—四〇圓
製品ノ種類	靴下及手袋	靴下	靴下	靴下
一年生産能力	靴下三、一六〇〇打 手袋一〇、八〇〇打	靴下二三、〇四〇打	靴下二八、八〇〇打	靴下二八、八〇〇打
同上金額	靴下三、一〇〇〇圓 手袋一八〇〇圓	靴下四六、〇八〇圓	靴下四三、二〇〇圓	靴下五七、七〇〇圓
現在實生産高	靴下一五、〇〇〇打 手袋一五、〇〇〇打	靴下三、〇〇〇打	靴下三、五〇〇打	靴下八、〇〇〇打
同價額	靴下二、七五〇〇圓 手袋三〇、〇〇〇圓	靴下六、〇〇〇圓	靴下五、二五〇圓	靴下一二、〇〇〇圓

職工賃銀（但食費は雇主の負擔とす）	熟練工月十八圓	同上	同上	同上
	普通職工同八圓—十二圓			
	見習年二五圓—三〇圓			

以上に依て見るに實生產總高及價額は靴下二九、五〇〇打、價格五三、二五〇圓、手袋五〇〇打、價格二、七五〇圓で生產能力より見れば靴下二割六分三厘弱、手袋四割六分三厘弱に當てゐる。次に一般中國人向として長春に輸移入する靴下及手袋の總量を推定するに大體次の如きものである。

イ、靴　下

日本製高級冬靴下	一〇〇打
同　高級合靴下	二三〇打
同　夏　靴　下	一七〇打
上海製高級冬靴下	二五〇打
同　毛綿交編冬靴下	五〇〇打
同上全綿（瓦斯）夏靴下	五、〇〇〇打
營口、海城、蓋平、遼陽、奉天製毛綿交編冬靴下	一三、〇〇〇打
同　全綿冬靴下	二一、〇〇〇打
同　合　靴　下	一二、〇〇〇打
同　（瓦斯）靴下	一六、〇〇〇打
哈爾賓製毛綿交編冬靴下	一二、〇〇〇打
同　全綿冬靴下	一二、〇〇〇打
同　合　靴　下	三、〇〇〇打
同　全綿瓦斯靴下	五五〇打
天津其他各地製各種靴下	一、五〇〇打

合計九萬七千三百打であつて長春に於ける需要總量十二萬六千八百打に對し長春の實生產高は僅に二割三分二厘に過ぎず大部分は外來品を使用してゐるのであるから當地に於ける靴下製造業は今後頗る有望なものと思惟される。

ロ、手　袋

日本製高級冬物	五〇打
上海同　上	五五〇打
同　毛　綿　交	一、〇〇〇打
營口、海城、蓋平、遼陽、奉天製毛綿交編冬物	九〇〇打
同　全綿冬物	五〇〇打
哈爾賓製毛綿交編冬物	三〇〇打
同　全綿冬物	八〇〇打

合計四千一百打にして長春に於ける總需要量四千六百打に對し長春の實生産高は僅に一割九厘に當るに過ぎぬ。從て其の將來は有望なるも靴下に比すればその需要數が尠いため餘り大なる期待は持てぬ。

八、吉林

當地の莫大小業は甚だ不振で下級靴下の生産あるのみで然しそれも品質はもとより價格に於ても外來品に對抗出來ぬ實狀にある。主なる工場の內容は大略次の如きものがある。

名稱	經營者	資本額	設立期	製品種類	所在地
吉林省立女子工廠	吉林省農鑛廳廠長 不明	民國十七年秋	同工廠の一部で靴下を作る	省域東關孔子廟西	
德勝里	李雲舫	一千圓	民國十三年	靴下	德勝門內
福利	馬春芳	一千五百圓	民國十六年	同	北大街夾信子胡同
源記	曲富榮	五百圓	民國十四年二月	同	北大街
泰記	王玉泰	八百圓	民國十四年八月	同	北大街
復興	李子隆	六百圓	民國十五年夏季	同	北大街夾信子

機械及職工

名稱	機械臺數	熟練職工	見習職工
女子工廠	十臺	女一名	女十五名
德勝里	十臺	五名	十八名
福利	十五臺	四名	二十名
源記	三臺	二名	五名
泰記	十臺	三名	十名
復興	七臺	二名	六名

製品は男女用下級靴下で一日の製造高吉林省立女子工廠四十五打、福利七十打、德勝里四十五打、源記十打、泰記四十打、復興三十打で價格は一等品現大洋五角、二等品三十錢、三等品二十錢である。

當地の斯業は技術拙く原料購入にも不便で將來に於ても大なる發展を見ること困難に思はれる。

九、哈爾賓

當地の莫大小工業は稍遲れて發達したのであるが漸次發達して、今日では最も旺な地方の一である。殊に當地の斯業には經營規模大で機械も新式で技術の進歩せる工場が相當あつて此點から見て滿洲中最も進歩せる地方と云ふ事が出來る。其等の工場名、所在地等を擧げれば大約次の如きものがある。

工場名	業主又は支配人	所在地	創業年月	資本金	一日生産高	工場面積	職工數
東盛工廠	韓敬五	中十一道街	一一・三年月	一、五〇〇元	一二打	一二平方丈	一四人
永新	常如松	北九道街	一六・八	三〇〇	一〇	六	六

林業	趙林	北十五道街	一六・三	三〇〇	一〇	六
天增	潘省三	桃花巷街	一七・一	四〇〇	四二	八
興大	王日宣	中十五道街	一七・五	三五〇	一〇	一二
恒順	楊鳴九	中九道街	一四・三	四〇〇	二〇	一二
同先	馬壽田	北十四道街	五・一	六〇〇	一五	二〇
東瑞	楊玉階	南十道街	一・一	二、〇〇〇	三〇	三〇
天成	馬裕如	中十一道街	一六・五	一、〇〇〇	一〇	六
經元	寗振明	北七道街	一七・三	五〇〇	一五	八
恒利	姜會臣	南十四道街	一四・三	五〇〇	一七	一二
增記	騰克己	大通街	一四・五	六〇〇	一〇	一〇
大吉	祥史松亭	北十八道街	一三・三	九〇〇	一五	六
順記	李堂	南十道街	一六・五	五〇〇	八	八
振興	鴻郭冶廷	南十六道街	一六・六	三〇〇	一五	一〇
德順	張和兆祥	中二道街	一六・三	二、〇〇〇	二〇	六
永順	孫明經	南十四道街	一五・三	六〇〇	一二	一〇
新益	張新亭	中十七道街	一七・一	四〇〇	六	七
震東	馮寶城	中九道街	一四・三	七〇〇	二五	八
榮興	茂宋盛芝	昇平街	一二・三	九〇〇	二〇	二四
振達	杜振平	中十一道街	一四・二	五〇〇	一五	八

恒祥	秦耿殿英	北十八道街	一六・八	二、五〇〇	四〇	四〇
玉仁	周廣延	中十道街	一七・三	三〇〇	一〇	六
魯泉	孔軾桐	北十五道街	一七・四	四〇〇	八	六
裕順	和王瑞臣	南動街	一四・一	四〇〇	一〇	一四
信興	劉市鼎	中十道街	一六・四	五〇〇	一二	六
興茂	長陸雲階	中二道街	一四・三	四〇〇	二〇	一〇
同興	李海軒	中九道街	一四・三	六〇〇	三〇	八
華業	王維昭	南十道街	一六・三	四〇〇	一三	八
利茂	姜成國	南十四道街	一四・三	一、〇〇〇	六	一二
新發合	宮璽	南十四道街	一七・五	三五〇	五	四

但支那側の工場は何れも傳家甸にある。

猶露人側工場は次の如し。

カーン　埠頭區斜紋街と第二線の角

マルコルヂヤ　同　斜紋街と大坑街の角

プログレッス　同　斜紋街

レコルド　同　バザールナヤ街十三番地

トリエスト　同　ヤポンスカヤ街十四—十五番地

ウオロノフ　同　キタイスカヤ街一四一號

前述の如く當地の斯業は相當進歩し、技術發達してゐるために其の原料も綿糸よりシルケットに、太番手より細番手にと漸次高級品に移りつゝある。最近一邦商の手を通して六十二番手の綿糸を見本として購入せし支那側の工場があつた。斯くの如き細番手向の機械を有してゐるや否やは不明であるが、支那側工場が該工業の發達に研究的に進みつゝある一證左とする事が出來る。人絹を原料とする當地の支那側及露國人側工場製品が市場に現はるゝも遠き時代に非るものと思はれる。

十、鄭家屯

當地に於ても大正十三年に莫大小工場興り、現在二戸の工場があり、靴下、手袋の下級品を製造し、兼ねて腿帶子、帶子等綿織物を作てゐる。其の工場の内容は次の如し。

工場名	經理人	資本(大洋)	設立期	一ケ年の生産額 靴下	一ケ年の生産額 手袋
義興工廠	張福廷	四、〇〇〇元	大正十三年春	九、一二〇	一、〇一〇
公民公廠	曹子常	三、〇〇〇	大正十五年春	五、五二〇	六八〇
計 二戸				一四、六四〇	一、六九〇

義興工廠　機械臺數　八臺　勞働者數　二〇名

公民工廠　六臺　一四名

機械の種類は次の如し。

義興工廠	利康牌	三臺	單價 七二元
	中洋牌	二臺	同 六八元
公民工廠	花旗牌	三臺	同 同
	中洋牌	三臺	同 同

機械數に比し勞働者の多いのは前述の如く腿帶子、帶子類の製造を兼ねてゐるからである。

當地に於ける全生産高は次の如し。

品名	現在の市價	昭和三年の生産額	摘要
七二靴下	四元八〇	五、四〇〇打	品名冠頭の數字は編針の數
一二〇電光平口靴下	二、五〇	一、五〇〇	平口は全體が同一の編方のもの
七二婦人用	三、八〇	九二〇	電光は糸を二度捻りたるもの
一四〇婦人用電光平口 同	一、五〇	五四〇	
一四〇電光小兒用 同	一、四〇	二〇	
一四〇電光婦人用 同	二、一〇	五五〇	

七二	電光綿婦人用	三・〇〇	一〇	三・五〇〇	
七二	綿製同	二・二〇	五	一・一〇〇	
一二〇	綿製同	二・一〇	五	九三〇	
計				一四・六四〇打	靴下生産總量
七二	毛糸手袋	四・二〇	三	九四〇	
七二	電光綿製同	二・一〇	二	四八〇	
一四〇	毛糸小供用同	一・二〇	一	二七〇	
計				一・六九〇打	手袋生産總量

當地の斯業も未だ附近の需要の一部を充してゐるに過ぎぬ實狀にあり、從て靴下、手袋の如き簡單なものに於ては將來相當の發展を見るものと思惟される。莫大小生地、襯衣類の如きは大規模生産の可能性無い當地では起る望無きものと思はれる。

十一、間島

當地に於ける莫大小製造は極めて最近の發達に屬してゐるのであるが相當の發達を見てゐる。其の製品は目下の處靴下のみで他には少量の目出帽及首卷を副業的に製造してゐるに止まる。

當地に於ける主なる莫大小工場の內容は次の如きものである。

イ　大壤織造所　龍井村第四區　經營者—金仲甫、廉聖述

本工場は大正十三年に一萬二千圓の資本で事業を開始し所有機械四十臺中現在二十臺を使用し、職工十五名及女工(自宅にて指上及護謨口を縫付けるもの)約百四五十名を使用し、一箇年に靴下約二萬打を製造してゐる。又同所は副業として目出帽及首卷機械數臺を据え、合計一年一千五、六百打を製造し目出帽一打九圓五十錢、首卷一打十二圓乃至十三圓で賣却する。

ロ　米福靴下工場　龍井村第四區　經營者—田洪奎

當地に於ける創始者で大正十二年金二千圓を以て事業を開始し、現在靴下製造機械十八臺、目出帽製造機械二臺を有し、職工八名、見習女工二十名を使用し、一年約五千打を製造す。

ハ　韓成襪子商會　龍井村第四區　經營者—洪箕澤

大正十三年資金一千圓で機械八臺を買入れて事業を開始し、目下職工四名、女工二十名を使用し一年三千五百打を製造してゐる。

ニ　金成洋襪工場　龍井村第二區　經營者—全南奎

昭和元年機械六臺を以て創業し現在職工五名、女工二十名を使用し一年三千打を産する。

ホ　金水靴下工場　龍井村第四區　經營者—李贊洙

昭和二年機械四臺で家內工業として始業し、成績良好なるため擴張の計畫中である。

ヘ　關升洋襪工場

昭工二年家庭工業として機械四臺で開業し、業績良好である。

尙以上の外に鮮人の家庭副業としてゐるもの三、四あり、外に支那人にて十數臺の機械を有し職工二十名を使用してゐる工場一箇所ある以外支那人で家庭工場的に製造してゐるもの一二ある。

本業の作業開始の當初に於ては技術極めて幼稚で下級品の製造のみに止まり高級品は主として大阪、京城より輸入を仰いでゐたのであるが、近時は其技術の進歩著しく高級品に屬するシルケット又はシルケット綿糸混交の製品も容易に製造し得外來品に遜色無きものを製造するに至た。內地製品と比較して見るに品質は全く同樣で內地物二重底瓦斯製品が一打四圓乃至五圓に賣却されてゐるのに地元產品は打七、八十錢の純利を擧げて三圓內外で販賣するを得るのであるから十分內地品を壓倒することが出來る。又支那產移入靴下に就いて見るに移出地は上海、奉天、安東であるが就中安東產が最も多い。此等支那移入品と地元產品とを比較するに地元產は打に付約二十錢方高價なるも品質に於ては遙に優て居て、支那品と同樣な物を作る時には四、五十錢安く出來るのである。斯くの如く當地の靴下製造は內地品及支那移入品に充分對抗し得る狀態であるから當地の住民間に相當の企業熱がある。目下一年の全製產高約四五萬打で間島に於ける消費高十五萬打の中殘部十萬打は輸入に待つ有樣であるから、今後は相當有望なものと思はれる。

昭和四年七月廿七日印刷
昭和四年七月卅一日發行

編輯兼發行人　南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課　佐田弘治郎
印刷人　大連市大江町二番地　荒木猪象
印刷所　大連市大江町二番地　合資會社日清印刷所

發行所　南滿洲鐵道株式會社

終